フェスタ
国立大学2017

地域の未来を考える
―未来を創る力とは―

平成29年度

大学改革シンポジウム報告書

島根大学 教育・学生支援機構 アドミッションセンター

開会あいさつ

島根大学長　服部　泰直

皆さん、こんにちは。本日は、島根大学が主催いたします本シンポジウムにご参加いただきましてまことにありがとうございます。この会場、ほぼ満席ということで、非常にうれしく思っております。高校生、大学生、また地域の方々、山下市長を始め、行政の方、それから我々大学関係者、それぞれの年代、それぞれのお立場の方々が多く集まっていただいております。教育を一つのテーマとしてこの場に集まり、これから半日でございますが、しっかりと議論、考えていただく、よい機会になればと思っております。

なお、このシンポジウムは、国立大学協会との共催ということで、国立大学協会から専務理事の山本先生にお越しいただいております。また、島根県教育委員会、江津市、江津市教育委員会から後援いただいておりまして、山下市長をはじめ教育長、江津市の皆さんにもお越しいただいております。まことにありがとうございます。さらに、江津市におかれましては、このような立派な会場を提供いただきまして、まことにありがとうございます。御礼申し上げます。

今、ここにありますように、大学改革シンポジウムという名称、これは、国立大学協会が銘打っておるのでございますけども、今、全国の大学において、大学教育のあり方、大学入試のあり方等、トータルに検討し直すということが行われております。本日のシンポジウムでは、本学が検討している教育改革、大学入試改革について、地域の皆さまと一緒に考える機会にしたいと思っております。

大学が地域の方々と直接お話をし、意見を交換する場というのは少ない状況にございます。地域の皆さまと意見交換ができることを楽しみにしています。このような機会をつくっていただいたことに、まことに感謝いたします。また、本日は高校生も多数参加いただいています、高校生の若い力、フレッシュな考え方やアイディアをぜひ私たちも知りたいと思います。さらに高校生と大学生、若い方達同士で、意見交換をしていただき、高校生についてはぜひ地域の未来を大学生と共に考えていただきたい。それから、地域の未来を創る力とは何かということを、各自で考えていただきたいと思います。未来というのは、高校生の皆さんがこれから生きていく、そのものが未来です。皆さん方の未来を皆さん方の力で切り開いていく、それを考える機会になっていただければと思っております。

私もこのシンポジウムに参加させていただき、この後、基調講演、それからワークショップ等聞かせていただきたく考えております。今日の議論を、今後の教育改革の参考にしたいと思っております。

今日のシンポジウムがご参加いただいております皆さんにとりまして有意義であることを祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

開会あいさつ

江津市長　山下　修

皆さん、こんにちは。ただいま紹介をいただきました江津市長の山下でございます。「地域の未来を考える－未来を創る力とは－」と題した平成２９年度大学改革シンポジウムの開催に当たり、開催地を代表して一言御挨拶を申し上げます。

さて、本市では、今まさに焦眉の急である地方創生の実現のため、平成２７年度に策定した江津市版総合戦略により様々な取り組みを進めております。この総合戦略では、目指すまちの将来像として、「このまちに生まれた子供たちは地域ぐるみの温かい子育て環境の中で健やかに成長をするとともに、自ら学び、自ら考え、そして行動をする力を身につけ、目まぐるしく変動する現代社会を生きる力を養います」という方針を宣言しています。そのため総合戦略の４本柱の一つに「住みたい、住み続けられる江津をつくる」という基本目標を掲げ、その重点施策として、保育所から小・中・高校と一貫したふるさとキャリア教育を推進することとしています。

本市では、とりわけ１５歳から２４歳の若者世代の就職や就学を理由とした人口減少が顕著です。人口減少はもとより、地域の活力や地元企業の雇用にも大きな影響を及ぼしています。こうした現況に歯どめをかけるため、子供やその保護者の皆様を対象に地元企業の理解を深める取り組みや子供たちを地域ぐるみで育む活動などを積極的に推進をしています。具体的には、企業見学会や職場体験に加え、様々な職業人を学校に招き、いわゆるワールドカフェや講演会、さらには地域ぐるみで子供の成長を支えるサタデースクールなど、本市固有の取り組みを進めています。

一方で、このふるさとキャリア教育では、情報通信や人工知能などによる技術革新など、目まぐるしく変革する社会情勢の中で、生きる力を養うことを目標の一つに掲げています。この生きる力は、家庭や学校はもとより、地域社会との関わりの中で培われる力であると考えています。

このたびのシンポジウムは、「地域の未来を考える－未来を創る力とは－」というテーマで、高校、大学、地域が未来づくりのためにできることをともに考える機会となっております。シンポジウムに先立ち、平素地域活動へ関わることが少ない高校生や大学生の皆さんが真剣に地域改革に取り組んでいただいたと伺っています。今回、皆さんが教材とされた地域には、過疎化や少子高齢化を背景に、様々な課題が顕在化していることをご理解いただけたものと思います。一方で、温かく皆さんを包み込んでくれる地域の包容力も感じていただいたと思っています。こうした取り組みを通じて、高校生や大学生の皆さんがふるさとへの愛着や誇りを抱き、将来、このふるさと島根を背負って立つ人材として活躍されることを心から期待をしています。

終わりに、本日のシンポジウムがご参加の皆様方にとって有意義な研修の場となりますこと、加えて、島根大学と地域との連携の一助となることを祈念し、歓迎の挨拶とさせていただきます。

平成29年度
大学改革シンポジウム

地域の未来を考える ―未来を創る力とは―

開催日　平成29年11月3日（金・祝）
会　場　パレットごうつ
主　催　島根大学
共　催　一般社団法人国立大学協会
後　援　島根県教育委員会、江津市
　　江津市教育委員会

目　　次

■ 開会あいさつ
島根大学長　服部　泰直
江津市長　　山下　　修 氏

■ 第１部
○基調講演 …… 5
【講　師】
国立大学協会　専務理事　　山本　健慈 氏
【テーマ】
「高校・大学・地域の連携で育てる未来の力」

○高校生と大学生による地域活動体験発表 …… 11
【発表者】
島根県立矢上高等学校　　２年　垰口　未佳、中平真結花、榎本龍之介、南原　隼人
島根県立江津高等学校　　２年　小川　凜子、土屋　那奈
島根大学生物資源科学部　　２年　東村実菜子
【進　行】
美濃地裕子（島根大学アドミッションセンター）

○総合討論 …… 22
【パネリスト】
山下　　修 氏（江津市長）、山本　健慈 氏（国立大学協会　専務理事）、
服部　泰直（島根大学長）
【コーディネーター】
泉　雄二郎（島根大学アドミッションセンター）

■ 第２部
○高校生と大学生によるワークショップ …… 29
【ファシリテーター】
高須　佳奈（島根大学地域未来戦略センター）
中野　洋平（島根大学地域未来戦略センター）
【参加者】
島根大学学生
島根県内の高校生

■ 付　録
参加者数、アンケート結果ほか

第１部

基調講演

【講　師】一般社団法人国立大学協会
専務理事　山本　健慈 氏
【テーマ】「高校・大学・地域の連携で育てる未来の力」

高校生と大学生による地域活動体験発表

島根県立矢上高等学校
２年　垰口　未佳、中平真結花、榎本龍之介、南原　隼人

島根県立江津高等学校
２年　小川　凜子、土屋　那奈

島根大学生物資源科学部
２年　東村実菜子（COC人材育成コース）

〔進　行〕美濃地裕子（島根大学アドミッションセンター）

総合討論

【パネリスト】
山下　　修 氏（江津市長）、
山本　健慈 氏（一般社団法人国立大学協会　専務理事）、
服部　泰直（島根大学長）
【コーディネーター】
泉　雄二郎（島根大学アドミッションセンター）

基調講演

高校・大学・地域の連携で育てる未来の力
・・若者へのメッセージ

一般社団法人　国立大学協会
専務理事　山本　健慈

皆さま、こんにちは。国立大学協会の山本と申します。

先ほど服部学長からもお話ありましたけども、この大学改革シンポジウムは国立大学協会の事業の一環として、全国の大学でやっていただいているものの一つでございます。そういう意味で、皆さんの封筒の中には、国立大学協会会長の山極壽一、京都大学総長の挨拶文を同封しておりますので、ぜひごらんいただきたいと思います。御存じのように、山極京都大学総長は、大変マスコミへの露出度が高い方なので、皆さんも御存じかもしれませんが、ゴリラの研究者でとても有名な方でございまして、アフリカで培ったゴリラと格闘した力でもって、国立大学を引っ張るというふうに言っておりますので、ぜひ関心を持っていただきたいと思います。

国立大学協会っていうのは、今、国立大学、８６の連合体です。全国に、日本の大学、幾つぐらいあると思いますか、皆さん。公立大学、県立大学とか私立大学全部足したら幾つぐらいあると思う、８００ぐらいあるんです。島根県は島根大学と島根県立大学だけですね、私立大学は今のところないですね。

というふうに、８００ぐらいあるんですね。国立大学は８６です。国立大学協会っていうのは、島根大学とか隣の鳥取大学とか山口大学とか広島大学とか、一番古いのは東京大学ですけれども、そういう８６の大学がありまして、一つの国立大学の制度という中で動いております。いろんな８６大学で共通する取り組み、今、大学入試の改革なども話題になっておりますけれども、それのこともどういうふうにやっていったらいいのかっていうことを議論して考えていく団体であります。

そういうことでありますけれども、御存じのように日本は大変、今、政治の話題にもなっておりますが、大学の授業料等学費が高い。国立大学でも５３万５～６千円ですかね。初年度でいうと８０万ぐらい払わなくちゃいけない。私立大学でいうと１００万を超えるというので、世界の中では大変学費は高いし、まれに見る高等教育への条件の悪いところだと言われております。それを何とかしなきゃいけないということで、我々も努力しております。島根大学に接する方もまだまだ少ないと思いますけれども、きょうを機会に大いに島根大学や国立大学に親しみ、関心をもっていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

さて、きょうはあと高校生と大学生の議論もあるということで、きょうのテーマに沿って、皆さん方、特に若い方々に私が伝えたいということを申し上げたいと思います。

自己紹介なんですけれども、私は、実は島根県のお隣の山口県で生まれました。昔、玖珂町といったんですけれども、岩国市になってるところに住んでおりました。昔、岩国から島根の日原まで岩日線というものをつくろうとう計画もあったのですよ。若い人は全然知りませんよね、鉄道を走らせろっていうのがありました。山口市にも住んでおりましたので、そこは津和野まで、山口線が益田まで走っておりますので、割と島根県とは縁がありました。父親は、養蚕、蚕の仕事をしておりましたので、そこには、この地域の、当時でいえば中学校を卒業して養蚕農家を継ごうという人が私の父親の働く蚕業試験場にたくさん来ておられて、その縁で私や、私の周りなども、最

近までこのあたり親しい方がおられましたので、割と来たところでございます。

最後は和歌山大学長をやって、今の職にあるんです。私の場合、大学だけではなくて、地域でもユニークなのは保育所づくりに３０年ぐらい関係しておりまして、その縁で、益田市には、２０００年代には結構来て、益田にもたくさんの友人がおります。島根大学は、この間いろいろ縁がありまして来ておりますが、そんなことできょう来させていただきました。

さて皆さん方、きょうは、後から高校生が総合的な学習の時間で地域に接した経験とか、大学生の方はＣＯＣの授業の一環で地域に出た研究をお話しになるということで、大変うれしく思っていますけれども、そもそも地域とは一体何だろうかっていうことなんですね。地域というのは、当たり前のことですけれども、いろんな人がいるところです。それから、山下市長もおっしゃいましたように、いろんな課題、問題、苦悩があるとことです。その一つの問題を考えてみても、それは見方とか考え方は、一様ではなくて、捉え方は多様にあり、対立や葛藤があります。これは地域の生の姿ですね。一つの問題をとってみても、それについて、これはいいことだと言う人もいれば、これはけしからんことだと言う人もいるぐらいに幅がある。それだけ人間というのは多様なものであるということですね。

その多様な中で、私が学長のときに学生さんたちによく言ったのは、とにかく地域でいろんな人に会う。いろんな課題にぶつかるというのを見ながら、自分にとってどんな姿が自分の幸せであるかっていうことを考えてくれと。

きのうも島根に来る途上、岡山のある町に寄ってきました。それで小学校、中学校、高校の教育について、いろいろ議論していたんですけれども、今、これはそこで出たのは、大変、大人も今窮屈な状況の中で暮

らしていて、あくせく暮らしていて、なかなか落ちついて自分のことを考えない、考える暇がない。けれども、若者は、今から５０年、６０年、７０年生きていくわけです。ですから５０年、６０年、７０年、どんなふうに生きるのが自分の幸せであるかっていうことをゆっくり考えてほしいなというふうに思うんですね。

今２０歳の人は、２０年後で４０歳で、３０年後で５０歳ですね。おそらくそれ以上皆さん長く生きられるわけで、そういうこれからの何十年後の自分の姿あるいは地域の姿、あるいは世界、３０年後、４０年後、自分は何をして、どういうふうに存在してるのが一番幸せなのかっていうことを考えてほしいなというふうに思うんですね。

そのことを、私、学長時代、入学式で話しました。入学式で、自分の人生の幸せは何かっていうことを深く考えて、そして、自分で考えるだけじゃなくて、それを友人たちと語り合ってくださいと。私としては、自分だけが幸せになるんじゃなくて、他者とともに幸せになるということを考えてもらいたいというようなことを言いました。それから、入学式って入学の学生は、ほとんど学長の話を聞いてないようですね。気分が舞い上がっていて。しかし、幸いなことに、お父さんやお母さんがいっぱい来てるんですよ、今の入学式。それで、あるときから私は、これは学生に言ってもしようがないと、来ている親御さんに言ったほうがいいなと思って、親向けのメッセージを入れるように変えることにしました。2013年の入学式では、こう言ったんですね。よく大学に入りましたねというのはもちろんなんですけれども、皆さんの大学の入学というのは、一定学力水準は達成してるので大学でも勉強できるだろうということで入学させただけであって、人間として一人前だっていうことで入れたわけじゃありませんと。これから自分が一人前の人間になる

Ⅱ

地域での出会いのなかで、

自分にとってどんな姿が幸せかを考える

5

- 10年後（40歳）、20年後（50歳）、30年後（60歳）
- 自分、家族、地域、どんな世界
- そこで「私は何をするのが幸せか」

6

2011年入学式

第一は、まずは自分の人生の幸福とはなにかについて、深く考えて頂きたいと思います。自分を考える、そしてなにが幸福なのかを考える、これを自分で考え、友人と語り合って頂きたいと思います。そして自分の幸福が、他者の幸福と通ずる生き方を確立して頂きたいと思います。

7

2013年4月入学式

本日から相対する皆さんを、私たちは、「人間形成上の諸課題をかかえている」と認識しています。冒頭、私は、「皆さんの入学までの努力を讃え」と申しました。皆さんの本学入学は、学力水準の達成によって判定されましたが、それは、皆さんが入試科目で一定水準を得る為の努力されたことによるものです。しかし、これはこれからの人生の出発点に達したことに過ぎず、一人前の人間となるうえでは、まだまだ諸課題があるのです。人間として未熟な存在なのです。

8

にはまだまだ課題があるので、未熟な存在であるということを踏まえてこれから取り組んでもらいたい。

学生だけが未熟だというのは、いけませんね。私は大学の学長としても教職員にもよく言っていたんですけれども、人間としての未熟さは教職員も一緒ですと。教職員も、学生の皆さんとともに人間となるための学習を積み重ねていくのが大学だと。教職員、学生が共同でそうしていくんだということを入学式で言いました。これが親御さんに言いたかった言葉なんですけれども、入学したっていうのは、学力水準において、落ちた人よりもよかったということで合格したんです。しかし、問題は自分の気持ちや考えを他者に伝えることができるか。そもそも人間が他者のことを考えることはできるか。自分ができることで他者を助け、自分ができないことは他者に助けを求めるっていうことができるのかなど、何をもって一人前であるとかという点で、自分の子供の存在、現在を見直してもらいたいと、親には、お伝えしたのです。

それはなぜかというと、島根大学ではわかりませんが、和歌山大学の学長でいた時に経験したことは、私はさっき保育所を経営をしているって言ったんですけども、保育所にトラブルのようなものが、全部大学でもあるのです。一番は、問題だなと思ったのは、学生生活を送るためにはいろんな手続きなどをやらなくちゃいけないですけれども、みんな親がやってしまう。奨学金の手続きとか、授業料の免除とか。自分でやらないで、親にみんなやってもらってる学生が随分いたのです。だから私は入学式でさきのようなことを言ったのです。半年後ぐらいに、学生関係の事務をやっている若い職員に聞いたら、「学長が入学式で言ったのが影響があるかどうかわかりませんが、今年は親が、手続きなどであれこれと事務に言ってきません」と言ったので、やっぱり言ってみるもんだなと思ったもので

す。皆さん方、生きるっていうことは、生活の中での一人前というのは、いろいろな実務も含めてやることができるということですので、そんなことを言ったんですけれども、とにかく皆さん方、地域での出会いによっていろんな人に出会うことができて、いろんな課題に会うことができる。その中で、自分はその問題にどういうふうに関係していくことが、自分の幸せになるんだろうかということを考えてもらいたいというのが、皆さんに訴えたいことの一つです。

もう一つは、今、ロボット、ＡＩの時代ということで話題になっています。皆さんのお手元にこういう冊子がありまして、とても美しい、新井紀子さんというロボット研究者で、数学者がそのインタビュー記事を掲載しております。ぜひこれを皆さんじっくり後から読んでもらいたいんですけれども、この新井先生は、このインタビュー記事、大変気に入っていただいたようで、みずからツイッターで、「私の考えをうまくまとめたものが出ましたので、ぜひホームページにアクセスして見てください」と発信していただいたようで、ツイッターが出た瞬間から、国立大学協会のホームページにはアクセスがべらぼうにふえたということです。おかげで初めて、この地味な広報誌がを多くの人に認識してもらったということになります。ロボットの時代って非常に今言われているのは、今話題になっているのは将棋とか、藤井君はロボットと将棋をやって訓練したとか、それから囲碁の何々さんはロボットに負けたとか、そんな話になってますけれども、いろんな事務処理的な職業のほとんどはというか、今の職業の半分ぐらいは、近い将来ロボットがかわってやってくれるだろうという話になっています。新井先生は、「ロボットは、東京大学の入試を合格できるか」いうプロジェクトでおやりになったんですね。このロボット君、残念ながら東京大学には合格できなかったんですけれども、恐らく島根大

「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトから見えてきたこと

13

人間しかできないことがある

「医者も教育者も研究者も、商品開発者も記者も編集者も、公務員もセールスマンも、耳を澄ます。耳を澄まして、じっと見る。そして、起こっていることの意味を考える。それ以外に、結局のところ、コンピュータに勝つ方法はないのです。」（新井『仕事をコンピュータが奪う』2010年日本経済新聞出版）

14

Ⅳ

- **地域での出会い**
- **そして高校・大学での共同の学び**
- **ロボットを超える力**
- **人間としての力を**

15

- **耳を澄ます**
- **じっと見る**
- **意味を考える**
- **「総合的な学習の時間」「COC関係授業」など地域活動体験のなかで、この「コンピュータに勝つ方法」が身についたのでは？**
- **ワークショップの話し合いで確かめてください**

16

学とか和歌山大学では合格できるっていう水準までは達したわけです。

ところが、新井先生はそれが言いたかったのは、ロボットが入試ができるかどうかということを実験したかったわけではなくて、詳しくは広報誌を読んでいただきたいんですけれども、今、我々が入学試験で、できたできないと言っていることは、逆に言うとロボットでも達することのできることしか、今の学校教育での学習とか教育ではやってないんではないか。むしろ人間としての創造性はその先にあるんだということを言いたかったんだと。これ、最後のほうにありますけれども、新井先生はこう言ってるんですね。ロボットの問題は、結局人間が何をできるかっていうことを突き詰めて言えば、考えさせる、考えなければならないと。医者も教育者も研究者も、そして商品開発者も、記者、編集者、ジャーナリストも公務員もセールスマンも、ここですね、耳を澄ます、耳を澄ましてじっと見る。そして、起こっていることの意味を考える。これはロボットにはできない。それ以外に、結局のところ、コンピューターに勝つ方法はない、「コンピューターが仕事を奪う」という中で言っておられますね。つまり、知識の量は最低限は必要ですけれども、それをやたらと集積して何とかそれで勝負するっていうのは、もうロボットが圧倒的に強い。その問題をきちんと考えるということ、そして、その意味を考えるということは、人間しかできないんだということなんですね。

さて、皆さん方が地域での出会い、そして、出会ったところでいろいろ発見した課題を高校や大学で学んでいくということの中で、ロボットを超える力、つまり人間しか持たない力っていうものは何かっていうことを探り当てて、つかみ取っていただきたいというふうに思うんですね。

私は、和歌山大学長時代にそのことを経験してもらいたくて、教育実習は僻地の学校にホームステイをさせてやるっていう制度をつくったり、それから、本当に山間、過疎の地に学生が出かけていって、住民の人たちが葛藤してる姿に出会わせたり、外国でいえばタイのような、貧困もあれば国境もあって、他民族との関係でなかなか葛藤が激しい場所に学生を連れていって、自分は世界で何ができるかっていうことを考えさせたりしました。そのとき学生が言ったことは、自分たちは受験勉強でそこそこ勉強がよくできると思っていたが、地域に出てみると、そんな勉強では全く役に立たないということを衝撃的に知ることができて、それで大学で何を学ぶかっていうことがはっきりしてきたということを次々と言いました。

ぜひ、今から皆さんお話しになる総合的な学習の時間で、どんなことを感じたのか。ＣＯＣの関連事業で、自分が今まで見たことのなかった風景とか、感じることがなかったこととか、どんなことを感じたのか。それをどのようにしっかり見詰めて、意味を考えたのか。その捉え方とか考え方は、１００人いれば１００人違うわけですので、何が正解であるとか、どういう捉え方が正しいっていうことではありませんので、ぜひ一人一人の見方、感じ方を出し合うことによって、お互いの認識の違いやどういうことが大切なのかっていうことを話し合って、確かめていただきたいというふうに思っております。

時間になりましたので、終わります。ありがとうございました。

高校生と大学生による地域活動体験発表

健康づくり
～ケアごはんで邑南町の人を元気に～

島根県立矢上高等学校　2年
垰口　未佳、　中平　真結花、
榎本　龍之介、　南原　隼人

これから矢上高校の発表を始めます。矢上高校の行事の一つで、地域に向けて自分たちの意見を提言する未来フォーラムという催しがあります。そこで、私たちのグループは医療、福祉について、「総合的な学習の時間」を使って地域について調べています。そこで、医療、福祉の免許のない私たちにでもできることは何か、と考えました。最初に、邑南町の現状について知ることから始めました。

まず、邑南町に多い病気を調べてみました。社会福祉士さんに聞いたところ、死因に多いのはがん、肺がん、心臓病などがあり、病院に行く理由や入院の理由としては、心臓病、高血圧、糖尿病が多いです。また、邑南町は高齢者が多く、「低栄養」という問題があります。「低栄養」が引き起こす問題としては、たんぱく質不足と免疫力低下があります。それによって、寝たきりにつながっていきます。

低栄養の改善方法としては、主にきちんとした食事をとることが大切だとわかりました。では、きちんとした食事がどんなものなのか考えたときに、「ケアごはん」というものを見つけました。

「ケアごはん」とは、病気を予防するためのごはんです。入れる食材によって、自分で予防したい病気を予防することができます。また、「ケアごはん」そのものを毎日つくるのは大変だと思うので、日ごろの食事バランスを意識することから始めることも大切です。そこで、ぴったりの言葉があります。皆さんは、「まごわやさしい

健康づくり
～ケアごはんで邑南町の人を元気に～

島根県立矢上高等学校
普通科２年

邑南町の現状

死因：がん　肺がん　心臓病

通院または入院：心臓病　高血圧　糖尿病

邑南町の高齢者の現状

低栄養のケア・予防

- **一日三食食べる**
- **楽しい食事にし、美味しく食べる**
- **バランスよく食べる**
- **栄養補助食品の利用**

健康長寿ネットより引用

ケアごはんとはなにか？

- **病気予防のためのごはん**
- **日頃の食事バランスを意識するだけでも良い**

こ」という言葉を知っていますか。この「まごわやさしいこ」という言葉は、健康な食生活に役立つ和の食材の最初の文字を覚えやすく言いあらわしたものです。この中の食材を意識して料理に加えることで、いつものごはんが「ケアごはん」に変わります。

そこで、実際に学校で「ケアごはん」をつくってみることにしました。私たちは、高齢者の「低栄養」を改善するためには、どのような食材が必要なのかを考えました。先ほどお話ししたように、邑南町の高齢者の方はたんぱく質が不足しているため、たんぱく質が多くカロリーの低い豆腐を使用し、また、筋力を維持するために必要な動物性のたんぱく質の多い豚肉、鶏肉を使用しました。免疫低下を防ぐために、たくさんの野菜も使用しました。

自分たちが実際につくってみた料理は、「豆腐入りつくね」と「白菜と豚ひき肉の炒め煮」です。実際に先生方、保健師さん、社会福祉士さん、栄養士さんの意見を参考につくり、試食してもらったところ、「味が濃い」「炒め煮はアレンジがきく」「もう少し炒め煮にとろみをつける」などの意見をいただきました。この意見をもとに再び料理をつくりなおし、１０月２５日に邑智郡邑南町上田所で行われている運動教室で試食をしていただきました。１０月２５日、上田所の運動教室にお邪魔しました。１７人の利用者さんに参加していただきました。「ケアご飯」とはどのようなものかを知ってもらい、実際につくり、試食してもらったところ、利用者さんたちからは、「炒め煮にとろみがあって食べやすい」「いろいろな料理に使えそう」と意見をいただきました。また、「もっと子供と触れ合う場を増やしてほしい」「実際に自分で気を遣って料理をつくっている」などの意見もいただきました。

これらの活動を通して、二つ気づいたことがあります。

一つ目は、「ケアごはん」は習慣化が必要ということがわかりました。このことから、目に見えるところにレシピや、「まごわやさしいこ」という言葉に気づくことができると習慣化されていくと考えました。

二つ目は、食事バランスの意識が必要ということです。日ごろ、自分で意識されておられる方もいましたが、より食事バランスを意識することで、高齢者にかかわらず、邑南町全体で健康な人が増えていくと感じました。

そこで、私たちはマグネットの配布、ケーブルテレビでの放送、矢高ニュースレターでのレシピの掲示を提案します。マグネット配布とは、先ほどから紹介している「まごわやさしいこ」を料理をするときによく目にする冷蔵庫などに張っておくことで、意識の向上につなげていくものです。ほかにも、ケーブルテレビ、矢高ニュースレターでレシピを紹介することで、たくさんの方に知っていただけると考えます。また、「ケアごはん」のレシピを応募してもらうことでさまざまな「ケアごはん」を紹介することができ、邑南町全体の意識の向上につながっていくと思います。

この活動を通して私たちが学んだことは、ただ単にバランスのよい食事をとるだけではいけないということです。実際に、上田所の運動教室のような活動に参加し、一緒につくって食べるということも大切だと感じました。また、「ケアごはん」は病気を予防する一つのツールであって、一緒に楽しむことで心のケアもすることができると感じました。

病気を予防する点に関連して、疫学という学問があると聞きました。最初に話したように、未来フォーラムに向け、予防学、疫学を詳しく調べていきたいと思っています。またアドバイスをいただけるとうれしいです。

これで矢上高校の発表を終わります。

江津高校「KAWARAプロジェクト」について

島根県立江津高等学校　2年
小川　凜子、　土屋　那奈

これから江津高校２年生の取り組みを発表します。発表者は江津高校２年、小川凜子と、土屋那奈です。よろしくお願いします。

江津高校では、「地域・社会を幸せにする」という、私たち自身の役割を意識するために、総合的な学習の時間を用いて、「ＫＡＷＡＲＡプロジェクト」に取り組んでいます。この名称は、江津が「瓦」の町であることから名付けられました。

地域の問題を意識するために、１年次には地域の方々を学校にお招きしてお話を伺い、地域課題について理解を深めました。２年生では、各自が設定したテーマで課題探究学習に取り組んでいます。２年生の学年目標は、「地域の課題を理解して、現在の自分との関わりを考える。」「地域社会における自己の役割を踏まえて、将来の進路設計を考え、それを自分の言葉で表現する」という２点です。今年度の主な取り組みは、この「課題探究学習」を柱としています。３学期には、各自が自分の成果として発表をする予定です。

今日は、２年生が中心となって夏休みに実施した地域活動についての活動報告と、今後、継続して取り組む内容について発表します。

江津高校では、生徒会を中心として、夏休みに小学生と関わる地域活動、「かわらっ子クラブⅠ」を実施しました。活動は、「学習活動」と「体験活動」の２種類で、小学生に案内をして希望者を募りました。「学習活動」は、自主勉強の支援や指導を行いました。小学生２０名ほどに対して、毎回担当を決めて、４名ほどの高校生が指導に当たりました。これは学習活動の様子です。小学生とのやりとりや、勉強の指導

方法に苦労をしましたが、少しずつ上手に対応できるようになりました。「体験活動」は部活動単位で参加してもらいました。それぞれの部活動で活動内容を考えてもらい、毎回２５名前後の小学生と一緒に楽しみました。これは「体験活動」の様子です。３年生女子の有志による参加もありました。それぞれの部活動の特徴を生かして楽しくできました。

この活動の後で、関わった生徒へのアンケートを次のような項目で実施しました。まず一つ目は、「どのような活動に参加しましたか？」という質問です。「学習活動」は１１日間、「体験活動」は７日間の実施でした。どちらにも多くの生徒が参加をしています。両方に参加をした生徒もいます。次に、「活動に参加したきっかけや理由」を尋ねました。部活動での参加が多かったようです。そのほかの項目の中には、「先生に誘われた」など、みずからの意志でない意見も見られました。活動を通しての感想としては、楽しかったという一方で、疲れたという生徒も多いことがわかります。次に、活動時間や活動回数について尋ねてみました。まず、「時間」については９０分間の活動時間を長く感じた生徒が何人かいたようです。「回数」についての回答もあわせて考えると、時間も回数も適当であると考える生徒が多いようです。続いて、「次回このような機会があればまた参加をしますか？」という質問です。多くの生徒が、また参加してみたいと考えています。「きっかけや理由」は、部活動や生徒会などで参加する生徒が多かったようですが、実際に体験をしたことでまた参加してみたいと考える生徒が多いことがわかりました。最後に、全体の感想や次回に向けての意見を尋ねました。「楽しかった」という意見が多い一方、「休憩後の勉強を集中させるようにするとよかった」など、次回に向けての具体的な意見も見られました。

今回のアンケート結果から、このような

活動を継続することで、江津高校生の活躍の場が広がり、自分たちの成長にもつながると考えました。そこで、「かわらっ子クラブⅡ」という企画をスタートさせることにしました。まず、地域の「都野津町づくり協議会」の方からお話をうかがった上で、今後の活動を考えることにしました。お話をうかがう中で、地域のことで私たちが知らない話も聞かせていただきました。「あぷりこ」の由来もその一つでした。「昭和の初め、食料不足に備えて各家庭に杏（あんず）の木を植える取り組みが地域でなされました。その名残で、今でも庭先にあんずの木が残っている家があるそうです。都野津コミュニティセンターの名称も公募により「あぷりこ」と名付けられました。

それを踏まえて、具体的な活動内容を次のように考えました。「①冬休みを使った小学生との活動」、「②あんずを用いて地元の町をアピール！」、「③都野津町迷路の作成」の３企画です。

まず、一つ目の「冬休みを使った小学生との活動」では、前回を踏まえて、内容をよりよいものにするために、小学生にアンケートをとることにしました。日程や内容を調整して決めた上で、参加高校生を募る予定です。二つ目は「あんずを用いた地域活性化」です。広く高校生に知らせて参加者を募り、地域の人々からの情報も収集してアピール方法を考えたいと思っています。３つ目は「都野津町迷路の作成」です。この企画では、高校生だけでなく、小学生と一緒にアイデアを出して迷路を作成し、実際に迷路で遊ぶ際にも、参加してもらえるようにしたいと考えています。「都野津町づくり協議会」の方とのやりとりも含めて、私たちが企画をしています。現在、一緒に活動できる生徒を呼びかけているところです。この企画を成功させて、今後も、この江津高校生の活動として継続させていきたいと考えています。

これで江津高校の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

かわらっ子クラブⅠ
体験活動の様子

かわらっ子クラブ
参加生徒へのアンケート結果

学習活動と体験活動に関わった生徒へのアンケートを実施して、集計、分析しました。

かわらっ子クラブⅠ
体験活動の様子

①どのような活動に参加しましたか？

かわらっ子クラブⅠ
体験活動の様子

②活動に参加したきっかけや理由は何ですか？（複数回答可）

かわらっ子クラブⅠ
体験活動の様子

③実際に活動をしてみて、どのような感想を持ちましたか？（2つ回答）
④その理由を記入してください。

⑤活動時間（90分）についてはどのように感じましたか？

かわらっこクラブ今後の活動「かわらっこクラブⅡ」

「都野津町づくり協議会」と協力して、地域を活性化する活動を企画しました。

⑥活動回数についてはどのように感じましたか？

都野津町の「あぷりこ」の由来

・昭和の初め、食料不足に備えて、各家庭に「杏（あんず）」の木を植える取り組みが、地域でなされました。
・その名残で、今でも庭先にあんずの木が残っている家があるそうです。
・都野津コミュニティーセンターの名称も公募により「あぷりこ」と名付けられました。
※「あぷりこ」はあんずの英訳「apricot」より

⑦次回、このような機会があれば、また参加をしますか？

具体的な活動内容

①冬休みを使った小学生との活動

②「あんず」を用いて都野津の町をアピール！！

③都野津町迷路の作成

⑧全体の感想や、次回に向けての意見を書いてください。

○楽しかった・楽しく活動できてよかった。（11人）

○来年も参加したい。・来年もやりましょう。

○休憩後、勉強に集中させるようにする。
休憩時間のあとは、もう少し声をかければよかった。

○小学生のためにもなり、自分のためにもなった。

①冬休みを使った小学生との活動

・夏休みの活動と同様に、「あぷりこ」を会場として勉強や遊びで触れ合う

1．小学生にアンケート調査
- 参加希望の有無
- 前回の感想や次回への希望
- 希望日時
- 活動内容の希望

2．「都野津町づくり協議会」との調整

3．参加高校生の募集

②「あんず」を用いて都野津の町をアピール！！

1．江津高校生に知らせる

・プリント配布やポスター

2．参加高校生の募集

3．地域に残っているあんずの木の持ち主に話をうかがう

③都野津町迷路の作成

・狭く入り組んだ路地が多い都野津の町並みを利用した迷路を作成する

1．江津高校生に知らせる

・プリント配布やポスター

2．参加高校生の募集

3．小学生と一緒にアイデアを出して作成

4．完成後、多くの人に参加してもらえる企画を考える

今後の活動に向けて

「都野津町づくり協議会」の方とのやりとりも含めて、私たちが企画をしています。
現在、一緒に活動できる生徒を呼び掛けているところです。この企画を成功させて、今後も、江津高校生の活動として継続させたいと考えています。

大学生として地域活動を通して学んだこと

島根大学　生物資源科学部　地域環境科学科
2年　東村　実菜子

皆さん、こんにちは。今回は大学生として、地域活動を通して学んだことについて発表していきたいと思います。よろしくお願いします。（拍手）

まず、自己紹介をします。東村実菜子といいます。邑南町出身です。生物資源科学部の地域環境科学科の２年生です。私は学部所属と同時に、ＣＯＣ人材育成コースにも所属しています。これは、各学部で地域貢献人材育成入試を受けて入学した学生が学部を超えて集まっているコースです。１学年が大体５０人くらいで、私はその１期生です。このコースは、将来、山陰地域に貢献、活躍したいという志を持っている学生を受け入れています。私は環境や生物に興味があり、それを通して地域に貢献したいという思いでこの入試を受けました。ですので、関心があることは環境アセスメントと地域づくりです。環境アセスメントとは、地域の環境を評価して今後の事業につなげていく活動のことです。地域づくりですが、私は地域の活性化のお手伝いに興味があります。

本日の内容ですが、私が経験した地域貢献活動について紹介します。そして、その活動で得られた課題、そこから今後に向けてのことをお話ししたいと思います。

まず、具体的な私が経験した地域貢献活動の事例を紹介します。これは私が１年生のとき参加していたもので、大学の授業や行事ではなく、友人に誘われて行っていたものです。その活動は社会人や学生が約１５人ぐらい集まっているグループで行い、もともとは地域の有志が実施していた地域活性化イベントのお手伝いとして、地域の交流人口をふやす目的で活動をしていました。その地域は島根県の山間部に位置する集落です。現在、このような場所は多いと思いますが、地域には数世帯しかなく、高齢化率１００％のところです。もともと地元の方が数年前から地域を活性化させるために行っていたイベントがありました。そのイベントというのは、地域にある資源を生かしてお祭りを行って、地域の外から人を呼び込んで交流人口の拡大を図ろうするものです。このようなイベントは、島根県に限らず、全国的に各地で行われてます。

そのイベントに私のような大学生や社会人の人たち１５名ぐらいが地域の外から関与して、お手伝いを始めたんです。イベント自体は今年の春行われました。秋から、準備を地域の人たちと一緒に行っていました。実際には、イベントを進めるための資金集めのクラウドファンディングやウェブでの方法、イベントで売るための商品開発や、もちろんイベント当日のお手伝いもしました。私は全般にかかわり、ミーティングにもほぼ毎回出席しました。そのおかげか、例年よりも来場者も増え、クラウドファンディングも決めていた金額も達成しましたので、一定の成果はあったように思います。ですが、成果を上げた一方で、私が感じた個人的課題があります。

私は活動を終えて、次のような個人的な感想を持ちました。つまり、私がこの活動に参加した最初は、とても地域のために良いことをしている、本当にそう思ってました。ですが、振り返ってみると、イベントをお手伝いしたことが本当に地域のためになったのだろうかと疑問に思いました。なぜかというと、活動中にちょっと違和感があったからです。

このイベントをお手伝いするために、松江市内で週１回程度ミーティングを行っていました。そこには地域の人は含まれていませんでした。ミーティングの場所で話し合われていたことは、イベントに関することやその地域に関することはわずかで、個人的な地域に関する思いをメーンに語り合

う場になっていました。地域であればどこでもよくて、もう自分がやりたいことを実現できればいいじゃんっていう雰囲気になっていました。そこに私はちょっと違和感を感じました。

さらに、イベント当日のお手伝いをしていて感じたことですが、私たちのお手伝いというのは、地域の一部の人には良いことだったかもしれないのですが、地域全体に貢献できるものだったのか。もしかしたら、他の人にとってはありがた迷惑だったのではないかという場面がありました。今振り返ってみると、この違和感の原因というのは、これは私自身のことですが、地域貢献しなきゃとか、地域活動をしなきゃという焦りがあって、若者やよそ者が交流することがその地域のためになるという思い込み、地域にとって本当に必要とされていることをよく考えておらず、地域貢献してる自分に満足していたのだと思います。今となっては、これは大きな反省です。

今回の地域活動で学んだことは、気持ちだけでは地域貢献はできないということです。今は、学生に対して、とりあえず地域に出てみなさいとか、地域で何かしなさいっていうプレッシャーをかけるような声が多くあります。一方で、私たちも何かしなきゃっていう焦りも出て、安易な気持ちで参加してしまうことがあります。ですが、地域が何を求めているのかわからないまま、言われるがまま地域に入ると、逆に地域を混乱させている、あるいは地域の負担になってしまう場合があるのではないでしょうか。イベントの手伝いや盛り上げ役は、確かに重要な地域貢献だと思います。しかし、大学で学んでいる者として、どのような地域貢献ができるのかと考えた場合、私は大学で学んだことを生かした貢献がしたいというふうに思います。

地域を知るためには、地域に貢献できるような専門的な知識や技術というものが必要だと思います。私はこれまで、地域で何かしなきゃということで地域を求めていましたけども、実際に地域に入ったことで、地域を求めるのではなくて、何か困ったことがあったときに、その解決のために逆に地域から求められるような、専門的な知識や技術を持った人材にならなければならないのだと学びました。ですので、私はこれから大学生活を送る中で、生物資源科学部での環境アセスメントを初めとした地域環境に関する学びを深めて、将来的には環境分野での地域貢献ができればと思っています。さらに、ＣＯＣ人材育成コースでは、地域を知るための専門的な学びや地域課題解決のための方法など学んでいきたいと思います。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

総合討論

【パネリスト】

山下　　修（江津市長）

山本　健慈（一般社団法人国立大学協会　専務理事）

服部　泰直（島根大学長）

【コーディネーター】

泉　雄二郎（島根大学アドミッションセンター）

○泉　大変お待たせいたしました。ここからは、３人のパネラーによる総合討論でございます。

コーディネーターを担当いたします島根大学の泉雄二郎と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、改めまして、パネラーのお三方をご紹介いたします。

皆さま向かって左から、山下修、江津市長様でございます。

服部泰直、島根大学学長でございます。

山本健慈、国立大学協会専務理事様でございます。

よろしくお願いいたします。

討論のテーマは、地域の未来を創る力を育てるとしております。お時間は２時半を終了予定にしております。

それでは、まず、先ほど高校生２グループ、大学生１名が地域をテーマにした学習の様子を発表をいたしました。彼らの、彼女らの発表について、ご感想やらご助言やら励ましのメッセージ等をお聞かせいただければと思います。

山本先生からお願いできますでしょうか。

○山本氏　一番最後に回ってくると思ってました。

矢上高校、それから江津高校、島根大学の発表、お疲れさまでございました。

矢上高校の学生さん、「ケアごはん」の食事ということで地域の皆さんの健康の状態をしっかり踏まえながら取り組まれたかをご発表されました。発表は、結果として、こんなことを気づきましたっていう発表でしたね。しかし恐らく取り組みの過程では、いろいろその中で具体的に地域の人々と接触する中でお感じになったり、それから疑問に思ったり、ああ、そうだなと思ったりするようなことがたくさんあったのではないかと思います。後からワークショップでお話しされるらしいんですけれども、結果に至るプロセスをもっとしっかり、たくさんしゃべってもらうと、恐らくその中にたくさんの経験が詰まってるんじゃないかなというふうにお聞きしました。

江津高校の学生さんのお話は、みずからによる地域課題の学習とともに、地域に接して、子供たち、小学生の方々との取り組みを発表していただいて、ああ、そうなんだ、高校生が小学生にコミットしていくっていうこともやられてるんだと思ったんですけれども、その中で、小学生たちのアンケートがありましてね。自分たちも少し前まで小学生だったわけなんですけども、ぜひ小学生たちが今何を考えていて、さっき大学生の話にあったんですけど、小学生は本当は何を求めているかっていうようなことを、恐らくつながりの中でお感じになってるんじゃないかと思うんですよね。ですから、自分たちが子供の時代の姿と、今おつき合いされた小学生の姿と重ね合わせて、今小学生が何を考えていて、何を求めているんだろうかっていうようなこともちょっと後の話の中で出してもらったらいいなというふうに思いました。

東村さんのお話は、自分が感じた違和感にこだわった、そして自分が何を助けるか、非常に貴重なお話だったと思います。私、新井

先生のところで耳を澄ますっていう話をしたんですけれども、今、地域に出るときに、地域の当事者が何を求めているのか、地域のことは地域の当事者が解決したいんだっていうことが最終の目的だと思うので、そのあたりで大事なことをこの短い時間におつかみになったんだなと思って、ＣＯＣの活動は健在だというふうに思いました。ありがとうございました。

○泉　ありがとうございました。

続いて、山下市長、お願いいたします。

○山下市長　私の方も、今、矢上高校の皆さん、それから江津高校、島根大学の東村さんのお話を聞かせていただきました。

矢上高校の皆さんは、「ケアごはん」ですか。これを通じて、いろんな気づきがあったというふうに発表になっておられましたし、また、江津高校の皆さんは、地域での子供の成長を支えると、これをやられたというふうに伺っております。さらには、東村さんですね。これはもう実際に地域に入って、様々な活動をされたというふうに伺っています。

今、江津市を始めとする地方の多くは、少子高齢化の影響などによって、地域力そのものが低下し、いろんな問題が生じています。そうした中で、今回の活動で高校生、大学生の皆さんが地域に直接出かけて、地域についてしっかりと考えていただいたということは、私は大変素晴らしいことだというふうに思っておりますし、また、実際に地域づくりに取り組まれていること、大変嬉しく思っております。

その皆さんが行われた地域活動の効果についてですけれども、これは、活動された高校生や大学生の皆さんにとって、実際に地域活動を行うことで、学校教育の現場で培われた日ごろの学習が実際にどのように生かせるのか、体感できたんではないのかなと思います。場合によっては、全く生かされてないよと思われたかも分かりませんが、また、それぞれの地域の課題に触れられて、これからどんな学習を積み重ねて行ったらいいのか。私はその方向付けになったんではないのかなというふうに思っております。

それから、先ほど東村さんが違和感という話をしておられましたけれども、地域の人たちにとっては、私はむしろ学生の皆さんから新しい視点がもたらされて、これまでやってきたやり方や考え方、果たしてこれでいいのかどうなのか。私は、考え直すきっかけにもなったんではないかなというふうに思ってますし、また、それを踏まえて、これからの地域活動の見直しにも繋がっていくんではないかなというふうに思っております。

今回の地域を教材とした教育活動っていうのは、高校生や大学生の皆さんにとって、学校教育であるとか家庭教育の中では得られない、生の体験ができるということ、また一方で、受け入れ側の地域の人の新鮮な価値観がもたらされるといった、私は効果があるんではないかなと思ってまして、大変有意義だと思ってます。今後も、やはりしっかりと、学校教育現場だけでなくて、地域の方へ出かけて行っていただけるといいかなと思いますし、また、そのことがひいては地域の活力に繋がって行きます。若い子達が入りますと、私も実際の現場を知ってます。地域の、特にお年寄りさん達が元気になりますので、今後もしっかりと地域に入って行っていただけたらと思います。

○泉　ありがとうございました。

服部学長、お願いいたします。

○服部学長　私、最後ということですが、まとめるということではなくて、私の個人としての意見を述べさせていただきたいと思いま

す。基本的には山本先生、それから山下市長のおっしゃったとおりだと思っております。高校生や大学生のお話を聞いた時のメモを見て思いますのは、３人の発表それから取り組みで共通してることは相手の立場になって考えると、こういうことにそれぞれ気がついたことが一番大きなことではないか思います。

最初の矢上高校の発表では、恐らく当初は、プランをつくったときには、健康で元気に高齢者の方に健康を保ってほしい、そのためには何かということで、料理という、ある意味、直接的な効果を狙った取り組みをされたと思います。でも、最後の言葉にあったのは、料理をつくってそれを提供することだけではだめだったんだよね。大切なのは、一緒につくって一緒に楽しむ、それが実は当事者の方にとってはすごく嬉しいことだったんですね。つくっていただいて提供してもらうことはもちろん嬉しいのであるけれども、実は高齢者の方はそういうことよりも、もしかしたら若い方と一緒に行動ができること、それが楽しかったのかもしれない。そういうことに気がついたこと。それこそが大切なことではないのかなと思います。

それから、江津高校の発表につきましては、小学生を対象なんですけども、ここも同じですね、先ほど先生方のおっしゃったように、小学生の気持ちになって人に指導するということは、その人の気持ち、その人の考え方とある程度同化することを試みないといけない。そのことに気がついたということが大きいと思います。

それから、島根大学の束村さんの発表で、非常に良いことを言ってくれたと思いました。ＣＯＣ人材育成コースの学生、しっかり育っていってくれていることを実感いたしました。それは何かというと、これも、地域から求められていることは何かということを地域の方の視点から考えたことだと思います。ある意味、親切の押し売りはだめだと。それから、市長さん言ってくださってるんですけれども、若い方が地域でっていうことで、一緒にやっていくことだけでも喜ぶんだと。よく私たち聞きます。そうすると、その言葉に甘えてしまって、いわゆる地域貢献をする自分に酔ってしまう。例えば大学であれば、そういう大学の取り組みにひょっとしたら我々は満足しておるんではないかと、そういうことにも気がつかさせていただきました。これは、私どもとしてもしっかりこれから考え直さないといけないし、また、学生一人一人がしっかりと考え直して、真の地域貢献とは何かということを考えたいと思います。

それから、もう一つ、束村さんの言ってくれた大切なことは、いわゆる自分の専門性をしっかり身につけて、その上で地域貢献したい。だから、まず生物資源科学部の自分の今、勉強していることをしっかり学んで、それを今度はＣＯＣの人材育成コースで地域を知ることにより、自分の知識を地域に活かしていくんだという発想、これは、島根大学が地域貢献を考えていくことの最も基本的な考えです。だから、このことを学生自らが理解して発言していただいたことを、非常に私は嬉しく思います。島根大学の学生については、その精神で自分の専門性をしっかり身につけ、それをもって地域で貢献する、役に立ち、自らもしっかりと元気はつらつと活躍できる、そういう学生を育てていきたいと考えています。以上です。

○泉　ありがとうございました。

会場の皆さまから、発表した高校生、大学生に何か励ましの言葉とか、ご助言等ございましたらお願いしたいんですが、どなたかございませんでしょうか。

それでは、また後半、最後のところでご意

見を求めようと思いますので、よろしくお願いいたします。

次のテーマでございます。今、立派に育ちつつある高校生の、あるいは大学生の姿を我々は目の当たりにしたわけでございますけれども、今後、彼らの力を一層高めるためには、私たち学校、地域、大人はどんな取り組みや心構えを持ったらよいかについてご意見を伺おうと思います。

山下市長、お願いします。

○山下市長　それでは、島根大学さんへ、要望も含めて、お話ししたいと思いますが、江津市では平成１９年度から地域コミュニティ事業の取り組みということで、今でも市内２０地区で住民の自治組織が形成をされております。まだ緒についたばかりですので、全ていいとは申し上げませんが、いずれにしても全地域で立ち上げております。そして、市の方ではこの地域コミュニティ活動をきめ細やかに支援をしているところです。

今回のプロジェクトでは、学生さん達が地域課題研究という形で地域活動へ参画されていますが、実は、本市ではこれまでも地域活動に大学生が参加をされて、地域の活動が活発に展開された例がございます。それは、江の川下流域の松平地区なんですけれども、地域コミュニティ組織が発足するまでの２年間、実は島根大学の教育学部人文地理学研究室の作野先生が島根大学の皆さんと過疎・高齢化に負けない地域づくりを実践する住民グループ活動を支援していただいたという事例でございます。この活動に関わられた学生さんの中には、松平地区を研究するということで、空き家問題を研究テーマにされた例もございます。また、この間、学生さん達は、そういった研究だけではなくて、地域の祭りであるとか、あるいは行事のときには積極的に参加されまして、学生さんが入っておられるときは本当に活気づいていたと私達も感じておりました。

また、今でも、当時その地区に通っておられた学生さんの中には、社会人になった今でも農家の皆さんとの交流を続けていらっしゃる方がおられます。少子高齢化が加速的に進む江津市では、先ほど申し上げましたように、地域コミュニティ活動の活性化、これがまさに今、江津市の最重要課題です。この地域コミュニティ活動の活性化の鍵を握っているのは何かと申し上げますと、とにもかくにも人材でございます。先ほどの発表でも少しありましたけども、地域に発生する課題を的確に捉えて、そしてその課題の解決策を提示できるのは、私は、人材だと思います。

また、地域住民の合意形成を図るために、コミュニケーション力ですかね。こういったようなことも私は重要であると思っております。こうした力は、今まさにキャリア教育によって求められてる力ではないかなというふうに考えています。

その上で、今後の島根大学のあり方について、少し学長さんに要望を申し上げたいと思いますけれども、人口減少や少子高齢化の進行が顕著な島根県に立地する大学として、本県の様々な課題をきっちりと認識し、社会の中でどのような形で貢献することができるかということを、どうか学生さん達に意識付けをしていただきたいというふうに思っております。ご承知のように、本県は全国でもトップレベルの高齢化、そうした意味で、逆に考えますと、日本の地方の未来像ではないかなと思います。この島根県で解決できる課題は、日本社会に顕在化する様々な課題の解決にも、私は繋がるのではないかというふうに思っています。どうか、そうしたことも踏まえて、島根大学においてはよろしくお願いしたいと

思っております。

また、高校生の皆さん、大学生の皆さん、この島根県で生まれたことを、私は、逆手にとって、地域の現状、課題に向き合う機会を増やしていただく。そして、課題解決力を付けていただければ幸いかなというふうに思ってますし、また、そうすることによって、学生さんたちのキャリアアップにも私は繋がるというふうに思っていますので、そうした観点に立って、今後とも取り組んでいただけたらというふうに思います。

私の意見は以上でございます。

○泉　山下市長、ありがとうございました。

大学に対する具体的なご要望もありがとうございます。

これを受けまして、服部学長、お願いします。

○服部学長　どうもありがとうございました。

今、市長さんからいただきましたご意見は、非常に耳の痛いところでもありますし、大学としては十分意識して取り組んでいるつもりではございますけども、やはりまだまだそれが地域の皆様に伝わってない、また、取り組みが不十分だということを痛感しました。

島根大学におきましては、地域貢献をまず大きな柱、それをいかに人材育成、それから研究両面で支えていくかということが課題と考えています。特に、今、人口減、これはどこの地区も抱えてる大きな問題ではありますけども、人口減に対する一つの対策として、本学の卒業生を、できるだけ多く島根県内の企業等に就職していただいて、定住する、その取り組みを、今、行っております。先ほど山本専務理事からお話しいただいたように、島根県には大学は二つしかございません。その島根大学と島根県立大学が力を合わせて高等教育を担い、地域に貢献できる人材をしっかり育てていきたいと考えております。

その上で、大切なのは、先ほど話をいたしましたけれども、やはり、地域が何を求めているのか、そのニーズの把握をもっとしっかりしないといけないということを痛感しています。よく学生と企業とのマッチングという話もありますけども、地域との連携活動を行うときにも、お互いの持ってるもの、それからお互いの求めてるものとを両者がしっかりと把握する、それが第一歩だと思っています。いわゆる大学側のひとりよがりによる地域貢献ではなくて、地域のニーズ、求めているものをしっかりと話しさせていただき、理解した上で、本学においてできる地域貢献、それから地域貢献のための人材育成に取り組んでいきたいと考えています。

それからもう１点は、島根県、非常に東西に長い県でありまして、島根大学は松江、出雲、いわゆる東部地区にあります。どうしても目が東部地区に向く傾向がありましたが、今後は、西部、石見地区にもしっかりと目を向けて、取り組んでいきたいと考えています。

実は、今回のシンポジウム、そのような意味合いもありまして、江津で開催させていただいております。島根大学がより石見地区の皆さんに身近な存在になるようにしっかりと取り組んでいきたいと考えていますので、またよろしくお願いします。以上です。

○泉　ありがとうございました。

それでは、最後、まとめとして、山本先生から、地域の未来をつくる力を育てるために必要なこと、何が大学、高校、あるいは地域に必要か。このあたりについてご助言をいただきたいと思います。

○山本氏　先ほどの冒頭のお話で、若者へのメッセージということでお話ししたんですけども、それは別に若者だけではなくて、大人、

市民としての大人、あるいは高校の先生もいらっしゃると思いますけれど、高校の教師としての大人、あるいは大学教員、大学関係者としての大人へのメッセージでもあると私は思っています。

つまり、ロボットを超えるっていうことで、耳を澄ますとか、じっと見るとか、意味を考えるということを言ったんですけれども、本当に山下市長おっしゃったように、課題がもう本当に満載であると。課題先進国とか課題先進地域なんていう言葉がありますけれども、恐らく世界がいろいろ直面する課題をみんな引き受けてるところがある。この課題を、本当に焦りに満ちた状況があるんですけども、それにちゃんと耳を傾ける、耳を澄ましてきちんと見る、意味を考えるっていうことが我々はできているかどうかっていうことを、大人自身も考える必要があると思うんですね。いろんな焦りに満ちて、いろんなメニューとかぶら下げられますので、右往左往することなく、それをしっかり見ることが必要じゃないかと思っています。

先ほど、私の大学時代の経験で、いろんな地域を研究してる先生たちが学生をフィールドに連れていったときに、学生たちは、自分たちの無知を恥じて、やはりしっかりした勉強をしなくちゃいけないというふうに、その先生たちの活動あるいは住民の方々の活動に巻き込まれるということによって思ったんですね。それは、本当に地域にコミットしている大学の先生たちが、まさに自分の専門的な知識をひけらかすというか、それで何か役に立つという以前に、その地域の人たちの本当に苦しんでいる、一生懸命取り組んでいることに対して、その先生自身が一人の市民として、同じ時代に生きる人間として、深くその苦悩を共有して、共感して、自分の人生をそこに役立てようという姿勢に学生が感銘したと思うんですね。やはり、自分がそういう一生懸命やってる先生たちの思いを見てて、自分たちも何かやれることがあるんじゃないかと思ったと思うんです。

「総合的な学習の時間」での取り組みについて、高校の学生さんのお話を聞きました。そのときに、その裏側に、そこの高校で取り組んでいる先生方は、その背後で、どういうその地域に対する捉え方をしておられて、まさにその地域の人の苦悩を学生さん以上に共有しておられて、どういうことが正確に課題だと思ってらっしゃるか。あるいは、大学の教師も、単に自分の知恵が役に立つという専門性だけじゃなくて、どれだけ同じ時代に生きる者として、市民として共感、苦悩を共感してるかっていうことが本当は今問われているし、そうでなければ、まさにアリバイづくりという形をつくるだけになってしまうんじゃないかというふうに思いますので、ぜひ、学生さんだけではなくて、それをコミットする大人のほうもしっかりそういうことを考えていくことが必要なんじゃないかと思っております。以上です。

○泉　ありがとうございました。

苦悩を共有する、共感するという、大変重たいテーマを我々は投げかけられたんですけれども、会場の皆さまから、何かご感想なりご提言なりご意見ございましたら、一つだけ、１点だけお聞きしようと思いますが、いかがでしょうか。

どうぞ。

○宮島氏　江津高校の校長の宮島と申します。

先ほどは、私どもの学校の生徒が発表させていただきました。この場をお借りしまして、感謝申し上げます。ありがとうございました。

世の中の最悪の不幸は、誰からも必要とされていないと感じること、というある人の言

葉がありますが、ひっくり返せば、誰かに必要とされている人生は最高に幸せだということになろうかと思います。そのためには地域に出てみないとわからない、あるいは、行動してみないとわからないことがあると思うんですけど、高校生の総合的な学習や地域活動は、むしろ失敗のほうが多い。私はそれでいいと思っています。

実は、江津高校の教育目標には「地域社会を幸せにする人を育てる」というのがありまして、これは何と司会をしていらっしゃいます泉特任教授がかつての校長時代につくられたものです。私ども、それを引き継いでおりまして、高校生を地域に出して、活動させたいと思っております。どうか、今後とも島根大学の皆さん、地域の皆さん、江津高校生が地域に出て失敗するかもしれませんけども、ご支援と温かい目で見守ってやっていただきたいと思います。ありがとうございました。

○泉　宮島先生、ありがとうございました。

そのほか、様々なご意見、ご提言等お持ちだと思います。お手元、アンケート用紙の感想欄をお使いいただきまして、皆さまからのご意見、頂戴したいと存じます。

それでは、時間を超過いたしました。以上で総合討論を終わらせていただきます。

パネラーの皆さまにいま一度拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

第 2 部

高校生と大学生によるワークショップ

【ファシリテーター】

高須　佳奈（島根大学地域未来戦略センター）
中野　洋平（島根大学地域未来戦略センター）

【参加者】

島根大学学生
島根県内の高校生

ワークショップ

「地域の未来を考える－未来を創る力とは－」

日　時　　平成２９年１１月３日（金）
　　１４：４０～１６：００
場　所　　パレットごうつ　会議研修室

○司会　これからは高校生と大学生が主役のワークショップです。ファシリテーターは、島根大学地域未来戦略センターの高須佳奈講師、中野洋平講師です。

今、高校生３５名、大学生２２名が１０班に分かれて、各班５～６人ずつで座っています。高校生は島根県内の高校から３５名、大学生は全て島根大学ＣＯＣ人材育成コースの１、２年生で、２２名です。これから、８０分のワークショップをします。大人の方は、適度な距離感で周りで見ていただければと思います。評価をお願いしている先生方には、どうぞよろしくお願いします。

では、高須先生、お願いいたします。

【ワークショップのねらい】

では、改めまして、地域未来戦略センターの高須といいます。本日はよろしくお願いします。

さきほどまでの、先生方の講義とか、高校生、大学生の発表を聞きながら、それをいかに自分ごとにしていくのかということで、このワークショップを開催させていただこうというふうに思います。大体、終わりの時間は４時、４時までやりたいかなと思います。

今日のワークショップのねらいは、本日のシンポジウムが、未来をつくるということでシンポジウムのテーマが出されていました。一方、先ほどのパネルディスカッションの中でも、市長さんのほうから、こういう力が必要だよというようなちょっとヒントめいたことも出てきてましたよね。このワークショップでも、命題としては、未来を創造するために必要な力って何だろうかということについて考えていただきたいなと思っていますが、いろんな考え方があると思います。でも、一つの方向性として、次の３点を挙げることもできるのではないかなというふうに思います。どれもきっと聞いたことある言葉ばかりですね。一番左のところに「主体性」と書かせていただきました。真ん中のところに、「協働する力、協働性」。また、一番右のところに、「多様性の理解」ということです。

このワークショップのグループ構成、メンバー構成は、きっと初めて会ったっていう高校生同士、また、大学生同士でもなかなか専門の違う学生同士が一緒になってるんじゃないかなと思います。このワークショップでは、先ほど申し上げた三つの力を伸ばすことに意識を置いてみたいというふうに思います。

【三つの力を伸ばすことを意識しよう】

でも、主体性ってどうやって伸ばすんだろうとか、協働する力ってどうやって伸ばすんだろうって考えること、あまりないですよね。この伸ばすって簡単に言うんですけど、すごく難しいんですよ。すごく難しい。何で難しいかっていうと、主体性って言われても、何となく抽象的ですよね。これができればとか、そろばんは何の計算が何分以内にできれば何級ですよみたいな、それとは全く違うんですよね。すごく抽象的で、それぞれ人によっても伸ばし方が違うんじゃないかということです。じゃあ、その伸ばし方って、とってもわかりにくいっていうことになりますよね。でも、何かつけなきゃいけない力だということです。

では、この伸ばし方がわかりにくいっていうこと、やっぱりこれ問題かなということで、少し手助けするとい意味で、今日、皆さんのお手元にはピンク色の紙があると思います。こういう紙、ルーブリックというふうに言いますね。もしかしたら、もう高校生でも使ったことあるよっていう人がいるかもしれません。大学生は、ほとんどが一回は使ったことがあると思います。このルーブリックとは、成功の度合いを示す数段階の尺度と、それに対応するパフォーマンスの特徴を記したものから成る評価基準表です。よく見ていただくと、例えば一番上のところ、「多様性を理解する力」。０段階のところでは、右側の１から３のどれにも当てはまらない、当てはまらなかった、少し右見ていくと、１段階目はこんなことですよ、２段階目は、３段階目はというふうに、成功の度合いが一つの尺度として示してあります。今日は短い時間のワークショップですけども、ぜひこのルーブリックを使って、短い時間で自分が何ができるようになったのかな、今まで気づかなかったけども、こんな力が自分にあるじゃないかというところに気づいてもらえればというふうに思います。

【ルーブリックで自己評価をしてみよう】

では、早速ルーブリックを使ってみましょう。まず、ビフォーのところを記入していただきたいなと思います。下のところに、自己評価、ワークショップをする前、三つの力はどの段階にあるでしょうか。ちょっと時間をとりますので、自分で考えてみてください。なかなか自分のことを評価するのって難しいと思いますけれども、挑戦してみてくださいね。一番初めなので、ゼロだって言っても全然恥ずかしくないですよ。

では、多くの人がそろそろ自分の評価を書き終えましたね。いいですよ、自分の評価だからね。皆さん、机の上では同じ紙が５枚、６枚とあります。人のとまざると困りますので、右上のところに名前を書くところがあると思います。もう評価終わったよという人は、名前を忘れずに書いておいてくださいね。大丈夫ですか。

じゃあ、皆さん、スタートラインに立てましたね。きょうは、このワークショップで、先ほどの三つの力を少し意識しながら活動に参加していただきたいというふうに思います。では、一旦はルーブリックを裏返して、ちょっと横に置きましょう。

【ワークショップのテーマ】

それでは、ワークショップのテーマを発表したいと思います。きょうは大学生と高校生が一緒にワークショップに参加しますが、実はこのワークショップのテーマ、大学生にも内容は知らされていません。ワークショップのテーマは、「地域の幸福度をはかる方法を考える」です。いいですか。すごく大きいテーマが来ましたね。

【ワークショップの流れ】

では、ワークショップの流れについて説明しますね。

① まず、初めて同士のグループですから、ちょっとまだ緊張があると思います。「ほぐす」という意味で、自己紹介をしてもらいたいと思います。自己紹介のやり方は、あとで説明します。

② その後、一人でブレストをやっていただきます。「一人で始める」ということ。

③ もう一回ブレストをします。これは、チームでやっていただきます、「集めて、つくり出す」という過程です。

④ 最後、「閉じる」ということで、全体でまとめます。

大体、足すと６０分間なんですけど、まあまあいいぐらいの時間になるんじゃないかなというふうに思います。

【自己紹介】

それでは、まず、自己紹介を準備していただこうかなと思います。皆さんのテーブルの上にいろいろなものが置いてあると思います。トレーの中に自己紹介用のカードがあります。一人１枚配ってください。また、チャックつきのかばんの中にマジックが入ってると思うので、マジックも一人１本当たるように準備していただけますか。

必要なものが手元に渡りましたか、。足りないってところないですか。大丈夫ですか。

今から自己紹介というと、私はどこどこ高校の誰それですっていうとその後が続かないので、ちょっと簡単な自己紹介ツールをつくってきました。手元にオレンジ色の、ちょっと貸してもらっていいかな、紙がありますね。吹き出しが、「実はほにゃららが自慢、すごい、魅力」の「どこそこ出身、誰それです」。ただし、自慢、すごい、魅力の修飾語、被修飾語は皆さんの出身地域、俺のお母さんがすごいとかじゃなくて、皆さんの出身地域の自慢、すごいとこ、ここ出身の誰それですっていうふうにちょっとフレーズを考えてもらいたいと思います。氏名、所属、学年を書くところがありますので、今から、短いですよ、３分くらいで考えてください。

では、用意スタート。「松江といえばほにゃらら」みたいなのを。……残り１分ほどになりました。いいんです、格好よくなくてもいいんです。いっぱいあり過ぎて選べないんだと思う。

では、そのあたりで手をとめていただいていいですか。こういうツールをつくるのも私、大好きなのでよくデザインしますけども、このように立てて使っていただくと、そうですね、机の上に立てて使っていただくと、後々、ディスカッションするときとかによいのではないかな、と思います。

では、順番は大学生のほうに任せますから、ちょっとグループの中で自己紹介タイムをとりたいと思います。３時までに終わるかな。用意スタート。いいですね。拍手が出るのはいいですね。

全てのグループが終わるまで待つので、終わっちゃったっていうところは雑談をしててもらっていいですか。大体終わったかな。

では、皆さん、結構地域自慢ありますね。何か大学生なんかもう話し出したらとまらないみたいな、愛があり過ぎてっていう人がちょっと若干多いのと、高校生はきっと、なかなかどれに絞ればいいのかわからないっていうとこで空欄の人がいるかもしれませんね。

【一人で考える】

この後、始めるということで、まず、一人で考えてもらう時間というのをしっかりとと

ろうと思います。いいですか。一人ブレストを始めます。ブレストのテーマは、もともとあった地域の幸福度をはかるには、地域の幸福度指標を考えるということなんですけれども。

一人ブレストって初めてだと思いますので、こういうことしますよ。つまりが、一人で考える時間なんですが、考えたことを付箋に書いていただきたいと思います。ただ、付箋を使うときのコツがあります。こういうワークショップって、よく付箋を張り出して格好よくやってるイメージありますよね。そういうところで、使えるコツがたくさんあります。

① 例えば、字ははっきり大きく太く書いてください。だから、こういうときにシャーペンで弱々しく書くのはちょっとよろしくありません。
② 次に、１枚１アイデアでお願いします。１枚１アイデア。例は、ゆで卵、これ、食堂のメニューをブレストするときの例を持ってきちゃったので、ちょっとそんなのになってますけども、１枚１アイデアを書いてください。付箋、もったいないなって思うかもしれません。でも、もったいないのは、付箋をもったいながって、やるべきことができないほうがもったいないので、こういうときは太っ腹に使ってください。
③ 三つ目、単語で書いてください。いろいろと、私はゆで卵が好きなので、でも、半熟っていうのは食堂にないから、これを提案しますみたいな、そういう文章で書きがちかもしれませんけど、その辺はしゃべるときに補足すればオーケーなので、単語で書いてください。単語でばしっと。
④ 四つ目です。これはすごい変なコツなんですけど、付箋って、上をのりにしたときに、下から上に剥がさない。付箋使いをマスターしていただくためには、左から右に、もしくは右から左に剥がすのが実はいいんです。何でかというと、上から下にめくっちゃうと、くるんってなってしまって、後で張るときにくるんくるんくるんばかりになるので、それを防ぎたいと思います。ここができれば、付箋使いのマスターでございますね。

では、一人で５分間考えていただきます。結構苦しいかな、５分。３分にしようか。３分間黙って、できるだけ多くの付箋を使い、できるだけ多くの一人ブレストをしていただきたいと思います。いいですか。もう一回言います。テーマは食堂のメニューではないですから、「地域の幸福度をはかるアイデア」を書いていただきたいと思います。

では、３分測りますね。様子見て、少し延ばすか決めたいと思います。用意スタート。テーマを忘れた人のために前に出しておきました。「地域の幸福度をはかるアイデア」を出してください。どこに着目しますとかね。いや、さっきの高校生の発表にすごいヒントが詰まってましたよ。矢上高校の発表をよく思い出してね。もしくは、江津高校の高校生の発表を思い出してくださいね。アンケートってたくさん書いてる人いますけど、アンケートをとるっていうのは方法ですね。方法ではなくって、どんなことについてアンケートをとりますか。何という項目をあなたなら考えますかっていうふうにね。　　。

じゃあ、また一人の時間にしましょう。今回、方法じゃなくって、何について問えばその地域が幸福だとはかることができますかというテーマです。

じゃあ、一応３分とりました。でも、まだまだ一人で考えるのは難しそうですから、ヒントを言いますね。ヒントは、さっきちょっと前のほうでも言ったんですけども、高校生の発表を思い出してください。矢上高校さんは、高齢者の健康に着目したんですよね。それって、地域の幸福度をはかる指標にはなり

得ませんか。また、江津高校さんのほうは、放課後、夏休みか、夏休みの小学生の学習支援に着目したんですよね。それはどうでしょうか。二つ考えてみると、高齢者がいかに健康な暮らしをしているかを一つ、項目として挙げてもいいかもしれません。また、小学生の学習の充実度みたいなものも挙げられるかもしれません。ほかには何かないだろうかということで、あと、２分だけ一人で考えてみましょうか。

では、２分間やってみましょう。

買い物ができるとかね。買い物に困らないとかね。だから、皆さんの自己紹介にも実はヒントがいっぱい詰まってたんですよ。すごいいいこと聞いてるよね。これもすごく大事だね。

あと１０秒。では、時間がたったようです。結構、一人でやるのってつらいですよね。私、途中で横でしゃべるから、ああ、なるほどと思って、また人の話を聞いてやれたかもしれないけど、一人って結構つらいんで、これ、今から、せっかくのグループですから、グループディスカッションしながら深めていきたいと思います。

【チームで考える】

このグループディスカッションで使うのがブレストという方法です。大学生はみんなブレスト一回はやってると思うので大丈夫だと思いますけども、ブレーンストーミングの略です。ブレーンは脳だよね。ブレストのコツというのがあります。今、皆さんの手元には自分が考えたアイデアが、１枚かもしれないし、ゼロ枚かもしれないんだけども、何枚かあるわけですよね。その何枚かを皆さんのチームの真ん中のところに張り出してもらおうと思います。とすると、こんな意見言うとちょっと恥ずかしいんじゃないかなとかいうのがあるかもしれません。でも、ブレーンストーミングでは、こういうルールでやります。たとえそのアイデアがちょっとおばかかもしれなくても、誰も批判する人はいません。批判は厳禁です。「それ、なくない？」って言うのはだめです。全然ありなんです。どんな考えでもありです。というわけで、自由にやっていただいてオーケーです。

なぜかというと、そのアイデアがすごく何か練られたものかどうかよりも、量が欲しいんです。普通、学校だと逆のこと言いますよね、量より質だよと。でも、ブレストだけは別で、質よりも量、これ、後で最後に種明かしをしますけども。また、便乗して、後から付箋を書いて出してもらうこともオーケーです。ああ、それ、すごいおもしろい、それって、じゃあ、こんなのもあるよね、ばしんっ

て、後から書いて出すこともオーケーです。いいでしょうか。

この作業するときに、ちょっと机の上の環境を整えていただきたいなというふうに思います。皆さんの机の横に、こんな大きな模造紙があると思います。この模造紙を机の真ん中に置いてブレストを始めていただきたいのです。

では、模造紙、よく見ていただくと、薄く透けて見えてませんか、何かが、２枚目には。ちょっと五角形のものをつくっていただきました。

３０分間で、後にこの２枚目を完成させてほしいんです。この２枚目、何がしたいかというと、町の幸福度チェックシートみたいなもので、例えばここに高齢者の話が出てくるかもしれない。ここに別のものが出てくるかもしれません。グループ６人ないし５人の出た意見を五つにまでまとめ上げてほしいのです。いいですか。１枚目の何も書いてない模造紙は、まず、グループの中でどんな意見が出るのかなということで、それ用の作業に使ってください。最終的に、今から３０分後にはこのチェックシートを前に持ってきてもらいます。２枚目だけ前に提出となります。約３０分間って言いましたけど、約３０分で大丈夫ですか。

この五角形の先に四角があるでしょう。この四角に当てはまる言葉をマジックででっかく書いて、前に持ってきてもらうと。大学生は、やり方わかりましたか？出してほしいもの。ちなみに、２枚目にこんな長方形は親切には描いてないですから、そこはそれ、うまくやってください。大丈夫かな。あとは、大学生のファシリテートに任せたいと思います。時間は３０分間。では、よろしくお願いします。

【まとめる】

では、一応全てのグループのが出ましたので、前に見に来てくださった方、一旦戻っていただいてもいいですか。ありがとう。

改めて、ざっと見ますと、結構苦しんだ割に皆さん、目のつけどころがとてもいいなと思いますね。２班は英語で書いてくれてますけどね。今回は、時間の都合で全ての班に発表してもらうっていうことができないので、例えばこの指標に至るまでの過程っていうのが本当はすごくおもしろいのがあったんだと思います。例えば例えば、「人間関係」、何でこれを考えたんだろうか。どうしてこの人間関係って言葉に行き着いたんだろうか。多分それぞれの努力ですごくディスカッションしたと思うし、この指標として立てるのが難しかった言葉もあるんじゃないかなと思います。

８班、「人それぞれの楽しみが重要である」っていうふうに書いてあるのと、隣の７班、実は「娯楽」っていうのも必要なんじゃないか。それって、とても考えたんだなと思います。幸福度の指標っていうと、やっぱりついついいいことととか、社会的にいいことみたいなところに落ちつきがちなんだけど、実は毎日毎日の楽しみがないと、つまんないで

すよね。としたら、「娯楽」っていうのも必要なんだなっていうところにたどり着けたんだろうなというふうに思います。

あと、５班のところに「経済」、「経済」はほかのところにもある。４班にもありますね。３班にもありますね。いろんなところが「経済」についても考えてくれました。自分の地域のとこでしっかり「経済」が回ってるかどうか、もしくは経済的に豊かかどうかっていうことですよね。そういうような指標も必要で、重要なことなんじゃないかなと思います。

あとは、「地域愛」とか地域に対する、どこだったっけな、誇り、「地域の誇り」ですね、そういったものも、やはりこの場所が幸せかどうかっていうのを考えるときには、ここに住んでてよかった、だって、ここが自慢なんだって言えるのはとても重要ですよね。きょうの皆さんの自己紹介カード、わざと、「ほにゃららが自慢」、「すごい、魅力のどこどこ町」みたいなところにしてもらったのは、このブレストで少しヒントになるかなと思ってつくったものでした。

こんなふうに考えてもらったんですけども、幸福度の意味を少し考えたいと思います。幸福ってどういう意味があるんだろうかということだったんですけど、幸福度という言葉を皆さん、聞いたことがあったと思います。実際に使われている幸福度の指標として、例えばブータンという国では国民総幸福量というものを使っているというのは、ニュースなどでも見たことがあったんじゃないでしょうか。例えば、その中では、大きく次の九つの領域の内容を問うてます。心理的な幸福、健康、教育、文化、環境、また、コミュニティー、よい統治、生活水準、自分の時間の使い方。皆さんのブレストの中で出てきたこととととても通ずるものがあるじゃないかなと思います。幸福度ランキングというのが書籍で出ています。どこどこ県は一番幸福みたいなこと。そういったところでどういう指標が使われてるかというと、やはり健康、文化、仕事、生活、

教育の５分野で構成されているということです。これは確かに一つの正解で、皆さんのがかなり正解に近かったということをあらわしてるのかもしれませんが、問題はそこではなく、なぜ社会は幸福度に着目するんだろうかというとこなんですよね。例えば、今まで国がどれだけ豊かかということを話すときには、ＧＤＰとかＧＮＰとか、どのぐらい経済が潤ってるか、経済的に豊かかということを問題にしてきました。一方で、そうではなくて、その国にいて、どれだけ幸福なのかが大事だよっていうような風潮になってきているっていうことですね。ですので、どうしてこれを着目するんだろうかということを考えるのも、未来を考える上ではとても重要なことだというふうに言えると思います。

誰もが幸せでありたいと思っていますよね。ならば、それが実現する社会像を全員が考える必要があります。誰かが考えてくれる未来に対して、自分が追う、追従していくのではなく、自分もその未来づくりの中で考えていく必要がある。なぜかというと、それ、人それぞれ違うからですよね。そんなことを考えていただけるというきっかけになればなというふうに思います。

【もう一度、自己評価をしてみよう】

一方、本日はこのワークショップを通して、自分が、ここが伸びた、もしくはできることに気づいたっていうことがあれば、それをルーブリックという形に落とし込んでいただきたいと思います。では、改めてピンク色の紙を取り出してみてください。では、少し書く時間をとりたいと思います。

まだ書いてる人がいるかもしれませんが、どうですかね。もう皆さん、すごい真剣に感想を書いてくださっていて、いや、後で読むのが楽しみです。

では、もう少しまとめをしてみましょうね。今のルーブリック書いてもらったことについて少しお話をしたいと思います。まだ書いてる人は手を動かしながら聞いてください。

【協働と多様性】

なぜ、そもそもの話なんですけど、先ほど言いましたね、そもそもとかいう言葉、とても大事なんで、面倒くさがらずに使ってみるといいと思いますよ。

では、協働と多様性の意味を考えてみたいというふうに思います。今回、自分一人でやったときのブレストのときとチームみんなで考えたときとでは、やっぱり違ったと思うんですよ。それについてお話ししますね。例えば、複数人でやるブレストの場合、何か普通のアイデアが笑えるアイデアになったりとか、笑えるアイデアから、全然思いつきもしなかった、つまり、一人だと思いつけなかったような創造的なアイデアに出会うことがあります。または、実際それを体感したと思います。少なくともどのチームも非常に笑顔でやっていたので、すごく笑えることがあったんじゃないかなと思います。そうすると、やっぱり考えることって楽しいと思います。一方で、一人で考えてるのって、すごくつらかったと思います。そんなふうに、協働することによって初めて新しい考え方が生まれてきたり、それぞれの考え方が深まる。だから、協働する必要があるということを知っていただけたのではないでしょうか。

【地域を学ぶ意味】

あと、地域を学ぶ意味についても、今日はパネルディスカッションなので、いろいろな先生方がお話をされていましたけれども、何で私たちは地域について学ぶんだろうか。島根大学では一応こんなふうな流れで学びを考えています。縦のラインは、専門知識の浅いから深いところまで、横のラインは、地域との密着度が低いところから高いところまで。これまで、例えば学部、学科では、地域との密着度が低く、でも、専門知識が高いことを習っていたのかもしれません。でも、一方で、

それがどういうとこで役に立つんだろうかっていうことを考えると、やはり地域のことを学ぶ必要があります。

ただ、今回の学生さんの発表の中でもあったんですけども、何で地域で学ぶんだろうということは常に意識をする必要もあると思います。また、それには、最初からこんなふうに地域できらきら輝けるっていうようなとこにはいかないと思います。初めは、地域のことを知ってみる、交流してみるっていうところから始める必要があると思います。その後、専門的な知識を少しずつつけながら、それってどういうこと、先ほど出てきましたね、そもそも、それってって考える、そのための知識をつけていく必要があると思います。また、その後、実行、挑戦って書いてありますけども、じゃあ、自分はこうする、こんなことにチャレンジする、地域でっていうふうに。ちょっとずつちょっとずつの段階を踏みながら、やはり自分の専門性に基づいて地域に働きかけることができる人材を育成していく必要があるんじゃないかなというふうに本学のほうでは考えています。

皆さんの資料の中に「しまね大交流会」のチラシも入れさせていただいたんですけども、１１月１８日に、じゃあ、地域でどんなチャレンジが行われているんだろうかということを知るような大きいイベントを大学主催でやってみようということで、企画しています。高校生の皆さんは、自分の進路を考えるっていうことで手いっぱいって思ってるかもしれませんが、いろんなことを知った上で考えるのと、何も気づかないで、ネットの情報だけで考えるのとでは、大きな差が出てくるんじゃないかなと思います。そういった意味で、今回このグループでいろんな人と話し合いをしたこと、また、その中で自分ができるようになったことを大事に、今後の進路選択につなげていってほしいなというふうに思います。

以上で私と中野が担当したワークショップについては、内容は全て終了です。長時間になりましたけども、ありがとうございました。

＜参加高校＞

島根県立江津高等学校、島根県立江津工業高等学校、島根県立矢上高等学校、島根県立浜田高等学校、島根県立浜田商業高等学校、島根県立益田高等学校、松江市立女子高等学校、開星高等学校（８校から３５人）

＜参加大学＞

島根大学COC人材育成コース（５学部２２人）

付　録

〇参加者数

〇事後アンケート結果

〇シンポジウムポスター

〇当日配付パンフレット

〇新聞掲載記事

平成29年度大学改革シンポジウム　参加者数

区分		人数
国立大学協会		3
島根大学		40
	教職員	18
	大学生	22
地域の方 （江津市関係、江津市コミュニティ関係、その他）		85
高等学校		44
	教職員	9
	高校生	35
報道関係		4
計		176

合計　176名

平成29年度　大学改革シンポジウム　アンケート結果

平成29年11月3日（金・祝）実施

設問1．このイベントを通して，どのようにお感じになられたか，あてはまる番号に〇をつけてください。

【回答：そう思う←　1・2・3・4・5　→そう思わない】

①　地域を学びの場として次世代の人材を育成することができると思う。

回答	人数
1.そう思う	40
2.まあそう思う	16
3.どちらとも言えない	7
4.あまりそう思わない	1
5.そう思わない	1
未記入	
総計	65

②　地域の中で，多様な主体（学校・地域住民・保護者・NPO・行政など）が連携，協働することができると思う。

回答	人数
1.そう思う	32
2.まあそう思う	22
3.どちらとも言えない	8
4.あまりそう思わない	2
5そう思わない	1
総計	65

③　高校での地域課題に関する学びを大学でより高めることができると思う。

回答	人数
1.そう思う	30
2.まあそう思う	19
3.どちらとも言えない	11
4.あまりそう思わない	2
5.そう思わない	1
未記入	2
総計	65

設問2. このイベントを通じ、心に残ったこと、キーワード、考えたことなど自由にお書きください。

【江津市民の方】

・山本先生の思考の変化と期待すること。
・地域とのつながり，積極的に地域に入り活動すること。まずは体験することが成果となる。
・「本当の地域課題」。それぞれの町で課題はあると思うが，我が町（人口 2800 人，適当に家も商店もある。海近で交通も特に不便もない，災害も少なく・・・）こんな町の課題は，そこに住む人々が課題を感じていないということ。おそらく根本的なことはそれだと思う。また，個人主義が蔓延しており，他人のため，地域のために自分を犠牲にするという考え方はない。
・自立して考えることから始まる。フィールドワークは自然，人文を問わず，進歩や発見，課題の発見と解決につながる方法であり，技能を見につける現場。
・東村さんの発表で気付かされるところがありました。自分本位の地域振興ではなく，真に地域に必要とされる地域振興が大切だと感じました。
・先ずこのシンポを江津市で開催していただいたこと，ありがとうございます。
地域づくりには，若い人の存在は大きいと考える。いろいろな取り組みは地域の活性化活動の参考になった。島根大学が地域課題に一緒になって取り組んでいただいていることに御礼申し上げます。
・教育機関で地域の取り組みがなされている事に，とても安心しました。地域で一部の人が参加するのではなく，皆んなが参加できて，楽しさ，充実感を実感できる取り組みが出来たらと思います。とても勉強になりました。
・連携（小中高大一貫教育の必要）教育支援
・東村さんが感じていた地域に対する違和感は究極のジュネレーションギャップでもあると思う。「未来への夢を追うもの」と，「その夢をあきらめた者」との。学校教育は実にとても重要で，決まった解のない問題解決能力のトレーニングが必要。そのトレーニングをしていない人たちの集まりの典型が三江線の協議会だったと思う。若い人の価値観を活かし，地域課題とを結びつけられるプロデューサ的リーダーがいれば良いのだけれど，地域にいないのが現実（元地域おこし協力隊より）
・高校生の活動に感心しました。
・島根大学の東村さんの発表は素晴しかった。大学２年生の意識レベルがこれほどに高いのかと感心した。大学，高校はこういう人材を育成していかなければいけないと思う。学力だけではいけないと考えさせられました。
・地域に必要な人材・・そのスキルとは？　子供たちに地域と触れ合う場をどんどん持ってほしい。
・地域の求める，求められる人材の育成！
・地域の課題を知った上での地域活動を住民と一緒に考え，行う。
・地域課題，創造力。
・耳を澄ます？じっと見る。意味を考える。人間しかできない。
・「耳を澄まし，じっと見て意味を考える。」地域の様々な課題解決につながるかもと思いました。
・地域を引っ張っていく若者が今後多く，世の中に出てくることが楽しみと思います。
・東村さんの発表。
・COC

・少子高齢化が進む江津市等地域の未来を，高校生や大学生が考え，取り組む活動について，聞く機会を得られた。今後も更に取組みを進めてほしいと思う。世代，枠組を超えた関わりの中で，相手の立場，思い，考えを尊重し合える地域ができあがることを望んでいる。
・ふるさと学習，キャリア教育，総合学習がそれぞれのステージを取り組まれているが，これらの連携が図られて，一貫した取組みになっているのだろうか。地域に子ども達を残す，戻ってもらうことを考えると，連携した取り組みが重要ではないかと考える。
・地域に愛着を持つ島根の高校生が，より多く島根大学へ入学できれば良いと思いますが・・・

【江津市外の方】
・「意味を考える」ことが大事
・COC 人材育成コースの学生の気付いたこと（自己満足化していないかとの問いかけ）と専門性を持つことの重要性に
対する認識
・AI・ロボットは“神”では無い。（人間は「利用」～せいぜい「共存」まで
現代の人類社会の混乱・妄動を収めるには『地球史』出番を要する。人類の「価値判断」「未来予測」に有益～必須！　AI・ロボットに出来なくて人間に出来ることに気付くことから始まる。
・高校生・大学生の実体験の発表が心強く感じた。これからの AI 時代を生きぬくための基礎力になるのではないかと思います。
・高校生・大学生の発表のレジメ資料があるとよいと思いました。パワポイントで発表されていたので，そのコピーしたものがあると話を聞きやすかったと思いました。AI について，「人間にしかできないことがある。」
・相手の立場に立つ。優しい目で見守る。
・小さなことに気づき考えることが大切で，いいことだと感じた。高校生がんばってほしい。発表でいろいろ感じたことでしょう。
・自分にとってどんな姿が幸せか。自分の幸せを考えるにあたって，地域の方々との多様な関わりが意味を持つということを強く感じた講演，発表でした。「地域から求められる人材になる」
・自分の幸せを考える。
・地域にとって本当に必要なことは何か？　幸せとは何か？
・地域　＝　人　と考えるのが正解なのか悩みます。
・地域貢献・・・・活動だけで満足しない・・・（それぞれが）課題をみつけ，歩みよれる位置の発見。
・地域に求められる人材になるという言葉が印象的でした。

設問3. 地域に貢献する人材を育成するため、島根大学に期待することがありましたら、自由にお書きください。

【江津市民の方】

・高校生とは行事のお願いはできるが，本当の地域課題，無関心，無課題ということについては無理であると感じている。島根大学生にそれを求めてはだめですか？
・地域課題解決に向けて，島根大学様の果たす役割は大きいと感じます。特に総論でなく，各論，個別具体の分野で課題解決に挑む姿がもっと見たいと感じました。
・江津市に是非入り込んで，地域課題について提案と同時に一緒に活躍を期待しています。
・出身地域に帰って今後の地域課題解決する人材の育成。地域活性化のための人材育成
・課題解決のトレーニングと調整しながら誘導していくリーダーシップを持った人材育成が急がれる。
・島根に想いをよせている子どもたちに，ぜひ，島根の良さを全国へアピールできるよう教育してほしい。
・大学入試は全国区なので，県外出身者がどうしても多くなる。県内出身者を増やす取り組みはもちろん県外出身者の県内定着の取り組みを考えていかなければいけないと思う。その方策の一つは，地域とのかかわり，愛着を持っていただくことだと思う。
・さまざまな地域に学生をふれさせる。地域の人と一緒に考える。地域の子どもたちの体験活動に何年間か教育学部の学生に支援してもらったが，その時のみの関わりしかなく，できれば続けて関係ができるようなシステムになれば良い。
・COC 人材育成コースに興味があり，人材育成に期待する。
・地域にサテライトオフィスをおいて，地域コミュニティの課題解決に取り組んでほしい。
・県外に出て行かれる学生さんも多いと思いますが，今日発表された学生さんのような方をたくさん育成していただきたいです。今日の発表とてもよかったです。心強かったです。
・島根大学は東村さんのような人材を大切にするべき。
・地域との関わりを続けてほしい。
・江津市へサテライトキャンパスの設置を検討されたい！

【江津市外の方】

・地域貢献人材育成入試の拡充を望みます。高校在学時の活動と地域貢献への意欲をきちんと評価し，優秀な人材（可能性をもつ人材）を合格させてほしいと思います。そのうえで，大学での専門的な知識，技術の修得への指導と支援を望みます。
・「洞察力」潤沢な若者に（多様体験を）。「成就を信じアキラメない」若者に（体を鍛える）。環境（自然・人々）を愛でる心を持つ若者になれ！
・島根大学の地域貢献人材育成入試に益々期待いたします。
・COC 人材育成コースの取り組みは初めて聞きましたが，とても良い取り組みだと思いました。
・地域貢献人材育成入試による生徒募集は今後も幅を拡げて実施していただきたいと考えます。また，今回のような高大と地域との交流の場を設けていただけることで，高校生の意識も高まり，本当に地域と関わる意味も深く考えることが出来ると感じました。特に西部の生徒にとっては大学生さん

の発表から大学で学ぶことの意義を大学生が意識できるこの育成コースの継続を強く感じました。また，地域に出かけることで，年齢や立場の異なる方々と接して，その現場や当事者の方々に迫っていくことができると思います。

・中学・高校への出前授業の充実。研究や実技・実習の相談窓口や申請の手続きの簡略化。アドバイザーとしての役割。

・地域に貢献する人材を大学で学ぶことができるようにさせるための入試改革をお願いします。

・地域の視点でお客様満足を追求してほしい。今は窓口がバラバラで，ワンストップサービスにほど遠い状態だと思う。民間の発想を取り入れるべき。

設問4. その他、お気づきになった点、ご感想等お願いいたします。

【江津市民の方】

・地域に貢献する人材を育成するためには，小学生，中学生，高校生の各年代に応じて地域について考える機会を積極的に設けると良いのではないかと思う。幼い頃からの意識付けがないと，大学生になってから地域のことを考えろと言われても，考えるきっかけやエピソードが思いつきづらい気がする。

・地域のニーズが現状維持だったりするので，夢を追う若者とぶつかるのはあたりまえだと思う。そこの調整ができるリーダが必要だと思うけれど，利害関係が複雑で難しいところなのか。

・地域の人も町づくりに共に取り組みたい。

・子ども達も立派な地域の構成員である。先ずは地域の大人が意識し，この点を活かすための地域コミュニティ組織の中に取り込むことが大切だと思う。若者がいないと言われますが，小学生，中学生，高校生も立派な若者です。

・学生の皆さんへ
コミュニケーション能力が大切。会う，聞く，伝える。いろいろな体験をして欲しい。

・私たちの時代には地域で「はたらく」大人の姿を見ることができた！今はIT化により，子供が大人の「はたらく」姿を見る機会が少ないように思う。目，耳で情報は入ってくるが・・・？

・クラウドファンテングやWeb など地域にいない人材がほしい。地域活動は何を目的にやるのかを今一度見つめ直すきっかけになりました。石見人の特性を考え，無理なくやっていきたい。

・地域は何を求めている＝高齢者は何を求めている。その地域にもよりますが，高齢者ばかりではなく，子育て，人口を増やす取り組みも必要ではないかと思います。

・大学でなされた人材育成が社会人として還元される必要があるが，育った学生を受け入れる企業，働き先が特に石見部には少ない。経済界ももっとPRしなければならないが，大学としても掘りおこし，学生に勧めてほしい。人間力のある若者が地域に残ることが地域の活性化につながると思う。頑張ってください。

・島大生の発表の内容に心がドキッとした。グサッときた。地域づくりについて，えらそうに言っている行政担当や，地域づくり研究所みたいなところの職員に聞かせてやればいいと思った。自分たちの自己満足じゃ地域に根づかない。

【江津市外の方】

・浜田市という同じ圏域に居住していても，このシンポジウムについて知る機会は殆どなかったというのが実際です。地域の現状と未来について関心を持つ方々も多いと思いますので，是非とも広報を再考していただきたいと思います。高校や大学の取組を市民が知る貴重な機会と思います。

・地元施設「少年自然の家」を活用しての“通学合宿”は賛成。現代の子供の体験不足，生活力不足の解消に役立つ。高校生，大学生の発表の姿勢（企画・調査・活動・まとめ（・反省））良し。ただし，発表力は不足，これも社会に生きる“人間力”の一つ

・開いた大学とは一般人が今日のようなイベントに参加出来て，大変参考になりました。

・地域について考え，調べ，どのように貢献するか考え，実際に取り組むことは，地域の活性化につながると同時に，日本の学校教育の課題である「考える力」を育むことにつながると感じた。
矢上高校の方の発表は考えたことや気づいたことなど，そこから学んでいること，学んだことを自分の言葉で発表していたことが，とても良かったと思う。

・ロボットの問題は「人間が何をできるか」を考えさせるというお話から，そのような人間としての学びを地域を含めた周囲の環境を活用することで，生徒が気づき，自分の力として身につけることが出来るのではと感じました。
発表から自分たちが動いて「手ごたえを感じた」「成果を出した」という経験が出来たことが伝わってきました。一方で，地域に出かけたことで，違和感を感じられたことが次の一歩につながる経験となっており，そのような意味でも学校現場だけでは得られない部分が地域活動の中にあるのだと感じました。今回は貴重な発表の場をいただきまして，ありがとうございました。

・有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

・いろいろな価値観を年代を超えてぶつけながら新しい価値を創っていくことが真の地方創生であると思います。その意味で地域に学生が出かけることは大変有意義なことだと思います。

・学生がりっぱに地域のリソースとして活躍している様子を聴いてうれしく思いました。

平成29年度大学改革シンポジウム

フェスタ 国立大学2017

地域の未来を考える

ー未来を創る力とはー

地域での活動体験は、高校生や大学生にどのような気づきを与え、成長をもたらすのでしょうか。また、それは未来を創る力とどのようにつながるのでしょうか。江津市を会場におこなう今回のシンポジウムでは、第1部で、地元の高校生と島根大学学生が地域から学んだことを発表し、これをもとに、高校・大学・地域が未来づくりのためにできることについて意見交換します。第2部では、高校生と大学生がグループ形式で「地域」をテーマに話し合うことを通して、今、社会で求められている力を養います。地域の未来についてともに考える機会として、地域の方、高校生、教育関係者、一般の方などのご参加をお待ちしております。

開催日 the date

11.3(金・祝)

開場12:30～
時間13:00～16:00

会　場	パレットごうつ ホール (島根県江津市江津町1518-1)
参加費	無　料
定　員	190名 ※定員になり次第申込みを締め切らせていただきます。

※申込みはFAXもしくはホームページより行ってください。
申込締切は10月27日(金)17:00までとなります。

プログラム program

第1部

13:00～14:30(会場 ホール)

●開会あいさつ

●基調講演「高校・大学・地域で育てる未来の力」
国立大学協会専務理事　山本健慈 氏(元 和歌山大学長)

●高校生と大学生による地域活動体験発表
発表者／矢上高校生徒、江津高校生徒、島根大学学生

●総合討論
パネリスト／江津市長、国立大学協会専務理事、島根大学長

【移動・休憩】

第2部

14:40～16:00(会場 会議研修室①・②)

●高校生と大学生のワークショップ
高校生と大学生が「地域」の姿について考え、グループで話し合うことを通して、協働性などの力を高めることを目指す活動です。
※江津市内外の高校生、島根大学学生が参加します。成人の方は、高校生・大学生の活動をご覧いただけます。

※障がい等について、特別な配慮の必要な方は、事前にご相談ください。

■主催:島根大学 ■共催:一般社団法人国立大学協会 ■後援:島根県教育委員会、江津市、江津市教育委員会

■お申込み・お問い合わせ先 島根大学 教育・学生支援機構 アドミッションセンター

TEL0852-32-6625 FAX0852-32-9726

[E-mail]admissioncenter@office.shimane-u.ac.jp　[HP]http://www.shimane-u.ac.jp/

【お申込み専用HP】
http://www.leaf.shimane-u.ac.jp/enquete/no/festa2017

平成29年度 大学改革シンポジウム

フェスタ 国立大学2017

地域の未来を考える

―未来を創る力とは―

平成29年11.3（金・祝）

開場12:30～ 時間13:00～16:00

会場 パレットごうつ

■主催／島根大学 ■共催／一般社団法人国立大学協会 ■後援／島根県教育委員会、江津市、江津市教育委員会

スケジュール

13:00～ ホール（2階）

■開会あいさつ

服部 泰直（島根大学長） 山下 修氏（江津市長）

第1部 13:10～14:30 ホール（2階）

13:10～

■基調講演

◆講師
国立大学協会 専務理事 山本健慈氏（元 和歌山大学長）

◆テーマ
「高校・大学・地域で育てる未来の力」

13:30～

■高校生と大学生による地域活動体験発表

◆発表者
矢上高等学校生徒 江津高等学校生徒 島根大学学生

◆進行
美濃地 裕子
（島根大学アドミッションセンター）

14:10～

■総合討論

◆パネリスト
山下 修氏（江津市長） 山本 健慈氏（国立大学協会専務理事） 服部 泰直（島根大学長）

◆コーディネーター
泉 雄二郎（島根大学アドミッションセンター）

第2部 14:40～16:00 会議研修室①・②（2階）

■高校生と大学生によるワークショップ

高校生と大学生が「地域」の姿について考え、グループで話し合うことを通して、協働性などの力を高めることを目指す活動です。

◆ファシリテーター
中野 洋平・高須 佳奈（島根大学地域未来戦略センター）

島根大学長
服部　泰直

島根大学長あいさつ

少子高齢化が加速的に進む島根県では、地域課題に向き合い地域活性化に取り組む人材育成が求められており、本学では地域貢献人材の育成を重点課題として取り組んでいます。この度、高校生と大学生が地域での活動について発表する場を軸にしたシンポジウムを、キャリア教育と地域活性化の取り組みを地域で一体となって展開しておられる江津市において、開催する運びとなりました。

本学では、全学部に「地域貢献人材育成入試」を導入し、学部横断的な「COC人材育成コース」を設置するなど、地域に関する実践的学びを強化しています。

本シンポジウムでは、このコースの学生と地域の高校生が、対話を通じて地域社会への関心を持ち、協働的な学びの体験から知的好奇心を高めることを目指しています。そして、皆様との意見交換により、意識の共有をさせて頂ければ幸いです。本シンポジウムが実り多いことを祈念しまして、挨拶の言葉といたします。

講師・パネリスト紹介

山本　健慈（国立大学協会　専務理事）

1948年山口県生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。1977年和歌山大学に着任、同大学生涯学習教育研究センター長、副学長等を経て2009年8月から2015年3月まで和歌山大学学長。2015年5月現職に就任。専門は社会教育・生涯学習論、子育て支援システム論。文部科学省中央教育審議会臨時委員（生涯学習分科会）。著書『地方国立大学一学長の約束と挑戦』−和歌山大学が学生、卒業生、地域への「生涯応援宣言」をした理由−

山下　修（江津市長）

1948年島根県生まれ。関西大学法学部卒業。1971年島根県入庁。2003年4月から島根県商工労働部長、2006年4月から2008年3月まで地域振興部長。2008年4月から12月まで島根県信用保証協会専務理事。2009年1月から2014年4月まで江津市副市長。2014年7月現職に就任。

服部　泰直（島根大学長）

1956年長野県生まれ。筑波大学第一学群自然学類卒業。大阪教育大学大学院教育学研究科修士課程修了、1987年理学博士（筑波大学）。1993年4月島根大学理学部助教授、1995年6月島根大学理学部教授、1995年10月島根大学総合理工学部教授、2011年10月総合理工学部長、2012年4月総合理工学研究科長。2015年4月現職に就任。専門は位相数学。

地域活動取組紹介

島根県立矢上高等学校

発表者
埓口　未佳（2年）
中平 真結花（2年）
榎本 龍之介（2年）

矢上高校普通科2年生は、毎年「総合的な学習の時間」を使い、邑南町の課題を考え、提言をしてきました。今年度は、自分達の興味関心や進路希望に沿って、できること・やりたいことを考え提言するのではなく、町民の方との会話の中から得たものを参考に、「町のため」「自分のため」にできることを考えました。本日は、医療福祉系に進学を希望している生徒が、「健康づくり」という観点から、管理栄養士や保健師、いきいきサロンなど多様な機関を巻き込んでいる「ケアご飯」について発表します。

島根県立江津高等学校

発表者
小川 凜子（2年）
土屋 那奈（2年）

江津高校では、「地域・社会を幸せにする」ための役割を意識して、総合的な学習の時間を用いた「KAWARAプロジェクト」に取り組んでいます。1年次には地域の方々からお話をうかがうことで地域課題への考えを深めることができました。2年生では各自が「課題探求テーマ」を掲げ、様々な活動を通してテーマについての考察を深めています。今回は、その一つとして夏休みに取り組んだ「地域コミュニティーセンター」での活動を中心に、今後の地域連携活動も含めた発表をします。

島根大学

発表者
東村 実菜子
（生物資源科学部2年、COC人材育成コース）

生物資源科学部地域環境科学科に所属する東村さんは、学部ならではの「地域」を学ぶ科目や専門科目を履修するとともに、学部を超えたCOC人材育成コースに所属して地域での実践力を養っています。

今回は、大学生として実際に参加した「地域づくり」の体験から、私たちがどのように地域と関わればよいのか、どのようなことが地域のためになるのかについて考えます。

江津市長
山下　修

江津市長あいさつ

「GO▶GOTSU!山陰の創造力特区へ」をスローガンに掲げる江津市の総合戦略では、基本目標の一つを「住みたい!住み続けられる江津をつくる」とし、「ふるさと・キャリア教育」に取り組んでいます。この中で、地元企業が教育現場へ入り、働くことの意義や自分がどのように地域に貢献すべきかを考える場面を設けたり、土曜日や放課後に地域の方と接して、様々な価値観に触れる機会をつくっています。今後のITやAIが発達する世界では、これまで以上に人と関わるスキルや、様々な人の意見を受け止めて新しい価値を生み出す創造力が重要となってきます。本市の教育活動では、こうした人づくりを最終目標の一つとし、学生の地域活動は、地域の活性化に寄与しつつも、学生自身が創造力のある人材へと成長し、未来へはばたくための教育プログラムそのものであると考えています。

今回のシンポジウムにおける関係者の皆様の多様なご意見から、今後の教育活動の新しい価値が創造されることを心から祈念し、歓迎のご挨拶といたします。

会場案内図

2F
ギャラリー
ホール
第1部会場
基調講演
ほか
シンポジウム受付
市民団体
活動室②
市民団体
活動室①
会議研修室
③
会議研修室
②
会議研修室
①
第2部会場
高校生と
大学生の
ワークショップ
ワーク
ステーション
江津
障がい児・者
基幹相談
支援センター
空　中　回　廊
江津市
社会福祉
協議会

1F
管理事務室
フリースペース
パレットごうつ駐車場の無料
申請はこちらへお願いします。
キッチン
スタジオ
江津市子育て
サポートセンター
交　流　広　場
スタジオ
江津市
観光情報
センター

石州赤瓦屋根の街並（島根県江津市）

国立大学法人　島根大学 教育・学生支援機構 アドミッションセンター 編

人とともに　地域とともに
国立大学法人
島根大学

〒690-8504　島根県松江市西川津町1060
TEL：0852-32-6625　FAX：0852-32-9726
URL：http://nyucen.shimane-u.ac.jp